私がお世話になったユスフ家も農村地域であることから、高床式の建て方である。玄関というスペースはなく階段を登りきったところで靴を脱いで入る。又、部屋の出入り口にはドアはなく、カーテンで仕切られている簡素な作りであるが、天井も高く、涼しく過ごす工夫が随所にうかがえました。よって、伝統的な高床式建て方ではクーラーは無用であることも頷ける。

マレイシアは多民族で国を形成しているが、民族の違いにより、居住地域や職種が異なっていた。これは、単一民族国家である日本に生まれ住んでいる私には、異様に映り複雑で理解し難いものを感じました。しかし、訪問の機会を得て接したマレイシアの人達は、皆人なつこい笑顔で心を和ませ、おおらかな人柄で私を歓迎してくれました。

なかでもホームスティのユスフ家は、一番上から９歳、８歳、７歳、いちばん下の子供が１歳半と男の子４人いてとても手がかかる時期なのに快く持て成してくださり、又、私に対する真心こもった態度に感謝しなければなりません。

子供達の無邪気で明るく伸びやかな姿に触れながら２泊３日のホームスティもあっという間に過ぎてしまいました。

いよいよペナン空港でお別れをするときになって、言葉は通じなくても胸は熱くなり、いつまでもいつまでも手を振り別れを惜しみました。

最後に、マレイシアの人々の親しみ溢れる態度と心に接し、改めて日本という国、そして日本人として、母として、妻として、一人の人間として自分を見つめなおす良い機会になりました。

国を超えての交流は必ずしも言葉が話せることではなく、お互いに内面からわかり合おうとする相互の理解であると思います。しかし、直接言葉を交わすことが意志疎通の第一手段であることから、２１世紀を背負っていく日本の若人の語学力の必要性もつくずくと感じました。

このような一生忘れることのできない貴重な体験に恵まれ、又、たくさんの方々からの協力や励ましを得て今回訪問できたことを心から感謝しております。この貴重な体験を今後生きていく上でのなんらかの形のバネとして、これからの国際社会に向けて微力ながら少しでも役立つ努力をと心新たな気持でいっぱいです。

アフターケア（マレイシア）プログラムに参加して

安　田　忠　正

晩秋の寒さが身しみかけた１１月末にわたしはアフターケアプログラムに参加、一転して夏の日差しと共にマレイシアへやってきました。私達が２１世紀の友情計画でやってきた研修員の国に今度は自分がやって来たのです。懐かしい顔ぶれが空港に出迎えにやって来てくれ、国際協力事業団の差し廻しの車でホテルへと向かいました。

地方旅行、表敬訪問、ディスカッション、見学等を通じていろいろな事を知り、又、感じ、今後の受け入れ活動に役立つ事例を今までと全く逆の立場から学びました。いつもは受け入れの地方分野別プログラムを担当している自分がまさに受け入れられ、地方での日程を過ごしているのです。

現地では丸8日間滞在しましたがその中で特に私達が実際受け入れに際し今後、考慮しなくてはならない点について述べてみたいと思います。

1つはプログラムの策定についてです。

私達は到着してその次の日のプログラムが変更になったことを教えられ地方へのプログラムがキャンセルになり（コタバルがペナンに変更）、どうなるのかと思っていたら、変更された現地では何事もなかったように平然と受け入れが開始されホームスティプログラムを含めたスケジュールが消化されたのです。（変更になった理由は二、三日前からの豪雨で車も汽車も不通になり多大な被害と損害を与えていたことによる）これは受け入れ組織がしっかりしており、その影響力が地方レベルへ行ってもしっかりしているということの証明に他ありません。ただこれはごくベーシックな面での評価であり、個々の展開については、多少つめの甘い面があり、なぜこんな事をするのかということもあり、考え方の違いというのか大まかであった様に思えます。ただその大まかさが私たちにとってはプラスになった面もあります。

プログラムの流れとしては満足できるものであり、多少ディスカッションの時間が短かったことを除けば快適に過ごせたと思えます。

次に姿勢、即ちこういったプログラムに対する心構えいうか、受け入れ側の態度についてです。私達が受け入れを行う場合、ともすれば問題になるのはこの事が一番難しいのです。この事業には二種の人間が関与するからです。1つはフルタイムワーカー（専門職）とボランティア、どちらも事業に対する思い入れは一緒なのですが、展開処理に専門職はスムーズさを要求し、ボランティアは遊び心を要求するようです。

この面で今回の受け入れを見てみると、その連携はスムーズに行っていた様に思います。それは専門職もボランティアのメンバーも同じ21世紀のための友情計画に参加した人間がやっているということです。これは大きい。同じ土俵を踏んできているからです。しかし今後こういった相互交流プログラムが増えて来るとどこまで、ボランティアを含めた受け入れ側の話合いが相方の意向を汲み取りながら計画を作り意志を統一出来るかが問題になると思えます。そして我々の間ではあまり取り上げられない問題ではありましたが、私たちが受け入れする場合に、マレイシアの宗教（イスラム）に大いに戸惑い、食事や生活にも特別の配慮を強いられ、それを彼らは、さも当然の様にして研修を終えて行くのですが、日本から来たということで日本流のもてなしや、日本食の配慮もなくなにも彼らが日本人ということを意識せずに対応していたのにはなにか自分たちが受け入れたときの苦労を考えてみると肩す

かしをくらったように感じました。

しかしながら、そうではなく私達をも含め国際人としての交流ということ考えているのだとしたら、かえってその方が気が楽かも知れません。

最後にやはり受け入れをしていて、又、これから受け入れる可能性のある国を担当者として実際ながめることができたのが、これからのことを考えると一番良かったと思います。生活、街並、そこで生きている人々を見、話し、話に聞いていたことを自分自身が確かめ、その生活実感を体験出来たこと、美しいモスクの建物、そこで実際祈っている人の姿、町の屋台での食事、タクシー、ショッピングセンターでの食べもの売場、百貨店に並んでいる品物、本屋での立ち読み、みやげもの屋でのなつかしい品々、それらがすべて、今までの受け入れ活動を補足し、これからの受け入れ活動をより充実したものにさせてくれる実感として私の頭、身体にしみこんできたようです。

この派遣を実施していただいた国際協力事業団に感謝を表すると共に今後の活動に生かして行きたいと思っています。

ふたつの大きな歯車

駒　井　真　弓

私は、合宿セミナー青年リーダーということで、メンバーの中でも唯一の学生であったため、何かと不安はあったのだが、私のこの若い世代の視点から、できるだけ多くのものを見て、感じとってこようと思った。

現地では、様々なプログラムが組まれており、同窓会のメンバーによって、最初から最後まで、行き届いた配慮がなされていた。ひとつひとつ様々な思い出があるのだが、私自身、受け入れられる立場に立ってみて、初めて、この"２１世紀のための友情計画"というものを、大きな目で捕らえることが出来たように思える。私は、合宿セミナーという３泊４日のプログラムを日本において、担当してきたのだが、視野が何と狭かったのだろうかということに気付いた。この３泊４日のセミナーの成功だけを考えて、全体の中におけるこのセミナーが果たす役割というものや、前後のスケジュールへの配慮といったものを、あまり考えていなかったのでは、と思われた。５年間という長いタイムスパンでもとらえられず、１回１回のセミナーの成功にのみ終われて、そして満足していたのではないだろうか、という気がした。今回の派遣で、私も合宿セミナーの立場からの要望や意見など、いろいろと、マレイシア側に取り入れてほしいものがたくさんあったのだが、現地での同窓会の現状を見て、私達の考えていたものが取り入れられて、うまく働くには、まだまだ時間がかかりそうだと思われた。私達の要望とは、セミナーのディスカッションが、いつもこちら側が一方的に準備して、彼らが受け入れるといった一方通行であったので、もっと事前に連絡を取り合って、両方でディスカッションの準備を進めて行きたいといった感じのものなのだが、まだ、こう

した細かいことよりも、やっと、２国間の交流が同窓会という組織が出来ることによってスタートラインについたのだと感じた。あまりに、日本人の感覚で、効果を急ぎすぎては行けないのだと思った。それだけ、国際交流というものは奥の深い、地道なものであり、又、そうでなければ、表面的なものでは、何の意味もなさないものであると実感した。これから同窓会が組織としてうまく運営され始め日本青年をどんどん受け入れて行けるようになると、本当の意味で、“２１世紀のための友情計画”が、実のあるものになると思われる。その為にも、我々は、大きな視点にたって、この事業を焦らず進めて行かなくてはいけないと思う。私も、微力ではあるが、ここでの経験を生かして、何かしらこうした交流に携わってゆきたいと思っています。

今回の派遣で感じた意義のひとつに、日本側のメンバーとの交流により、得られたものも又、大きいということがある。日本においては、一緒に会える機会のない、それぞれの分野の方々に、この計画についてのいろいろな話しを聞くことができ、本当に多くの人々の手でこの事業は成り立っているのだなあと実感することも出来たし、自分の立場もじっくりと考え直すことができたように思う。これから先この計画に携わってゆく上で、非常に役立つと思われるし、今後の交流事業のことを考えても、そういう意味では、今回の派遣は、貴重な機会であったのではないかと思われる。

最後に、今回が第一回目のアフターケア調査団ということであったが、振り返ってみて、やはり、もっともっと多くの青年が、相手国を訪れ、私の様に、何かしら得るものを感じることが出来たなら、それがたとえ小さな、些細なものであったとしても、必ず、それが１つの歯車となって、日本とマレイシアという２つの大きな歯車を回す力になるに違いないと実感している。

テリマカセ！　ジュンパラギ！　マレイシア

丸　山　良　雄

マレイシア滞在も残り少なくなった或る日の夕べ、クアラルンプールでの夜の集いが佳境に達した頃、ある者は感慨深げにそして熱っぽく旅の印象を語り、又ある者は過ぎし日々を辿るかのようにじっとグラスを見入る。旅の終わりにあたりそれぞれの胸に去来するものは何であったろうか。

２１世紀のための友情計画におけるマレイシアとの交流は１９８４年、アセアン青年招へい事業で受け入れしたことに始まり今日迄続いてきたわけである。

さて本年度より始まったアフタケアープログラム派遣事業はこのマレイシアをはじめとしてアセアン諸国に派遣することになった。青年招聘事業実施に中心的な役割を果たした受け入れの分野別プログラム担当者および関係者で構成した調査団が帰国青年の日本理解と研修につきフォローアップすると共に、調査団メンバーが各国の実態を把握し、より効果的なプ

ログラム策定に資する事と併せ、片側通行であった交流事業を相互形式に発展，拡充させることによって一層の信頼と友情を高めもって永く将来にわたって両国の親善を深める礎を築くことにある。

調査団メンバーはほとんどが初対面同志であったがこの“２１世紀のための友情計画”の各団を受け入れているという共通の認識のもとメンバー相互の融和につとめ素晴らしい仲間へと変身し、派遣団の成功を確信できるようになった。

１９８８年１１月２２日、東京に全員元気な笑顔で集合、旅行の成功を互いに誓い合い、２１時３５分マレイシア航空ＭＨ９５便にて成田空港を後に空の人となった。機内では何となく落ち着かないマレイシアの旅への期待とちょっぴり不安を含んだ複雑な顔が印象的であった。

以上のような経過を経て、１０日間のマレイシア各地を回る旅が始まったわけである。本団の詳細日程等に関しては、本文の行動記録を参照していただくことにするが、いずれの訪問地においても受入団体であるマレイシア政府人事院と来日青年の同窓会組織PAMAJA（パマジャ）の献身的な努力と親身な心遣いにより全員が深い喜びと感動に満ちた素晴らしい滞在となった。

旅は続けられた。緑の国土は地平線上の彼方へと続く。なんと美しい国であろうか。１０日間という限られた日程の中でその風土と心を垣間見、そこにあって微妙に揺れ動く日本の立場を理解してきたわけだが、顧みるにそれぞれ思いは異なっても体制の違う国へ来たにしては実に恵まれた旅だったと云えよう。それは取りも直さずに多くの人々の善意と努力によってなされたものであることを我々は忘れるわけにはいかない。クアラルンプール……“泥の川”の合流点にいま青春の真っ只中にいる近代的なビルがそびえる緑のメトロポリス。ペナン……静かなインド洋の波に洗われる、遠い昔を偲ばせるジョージタウン、ふところの深さ示す２００年の歴史。マラッカ……東西の文化交流のあとを史跡に残す、ヨーロッパの雰囲気を醸し出す、数々の歴史的変遷を経た街……と、３地域を回ったが、歴史的にも文化的にも違う土地を実際に訪れることはマレイシアを理解する上で団員一同とても勉強になった。

ありがとうマレイシアまた会いましょうマレイシア

人形から流れてくるようなあのエキゾチックな唄の調べに、どこまでも青い空に透きとおった海と緑濃い森の中にそびえる街並み、ホットなマレー料理、朝な夕なに楽しかった彼の旅、マレイシアで会ったあの懐かしいひとなつこい仲間たちが帰ってくる。クアラルンプールで、ペナンで、マラッカで歌った調べにのせて……。

7. 提　言

この派遣事業は、非常に有意義な企画である。それはまさに“２１世紀のための友情計画”

で実際にプログラムをハンドリングする実施担当者および関係者が参加できることである。今回、本団には実施担当者が共通、都内、合宿セミナー、地方、ホームスティ、視察とプログラム全期間を網羅していたため、参加者同志がお互い日程を策定するために改めて認識するのにもよく、且つマレイシア側との意見交換や各機関の訪問にはこの調査団の目的を遺憾無く発揮することができたことである。特に、帰国青年とのセミナーでは日程の流れに沿って各実施担当者がディスカッションに対応でき効率的に進めることができた。何よりも各実施担当者がその国の事情を知ることは重要なことである。各滞在地や滞在地で接触した方々から社会情勢、国の政策、民族、宗教、気候、文化、食生活、産業の状況、経済事情等を紹介していただき、見て、聞いて、理解することが容易でありました。また、同窓会メンバーでもあるホストファミリーのお宅での家庭滞在プログラムや同窓会のメンバーとの２～３回の交流会では日本滞在中のプログラムについて我々が各実施担当者であることや既に顔馴染みであるということで直接、忌憚の無い意見を聞くことができ、２泊３日と短い期間ではあったが家庭生活を通して実際に異文化に接し吸収して、次年度からのプログラムにフィードバックできるからである。

この派遣事業を、より効果を期待するには派遣団の事前の研修や準備が必要になってくる。国によってはモンスーンなどの気候的な諸条件もあるので派遣時期についてはその年度のアセアン諸国が総て帰国してからでなくともよいのではないかと思う。同時にそのことによって実際、招へい事業の来日青年が出発前の現地プログラムに参加している状況や講義などを視察できるし、該当する受け入れ実施団体でなくとも、実施担当者と来日青年が接触が持てることは立体的にこの事業を理解しあうのには好都合であることもある。

フィリピン

S.63.12.1～S.63.12.10

(社)青年海外協力協会

1. 調査チーム派遣概要

1－1　調査チームの構成

	氏　　名	生 年 月 日	性別	
チームリダー	山形県職員 佐藤　　諭	S 34年 4 月14日	男	990　山形市大野目２丁目２－４６ 山形県企画調整部企画調整課国際交流課国際交流係
メンバー	清水　利泰	S 16年 3 月20日	男	990　山形市飯塚町１２７ 山形ホームスティ受入家族
メンバー	横田　直彦	S 25年 9 月19日	男	289－01　千葉県香取郡下総町西大須賀２００３ 成田市農業共同組合管理課係長
メンバー	斉藤　栄司	S 34年 5 月27日	男	990－21　山形市大字灰塚８１ 山形県青年海外協力協会
メンバー	木　村　勤	S 20年 1 月 4 日	男43	東京都豊島区東池袋１－３１－４－３１１ （社）青年海外協力協会

1－2　調査日程

日順	月日	曜	行　　程
1	12　1	木	成田発　10:15(PR431)　マニラ着　13:50 ホテルチェックイン・自主研修・JICAマニラ所長主催夕食会
2	12　2	金	午前　9:00　JICAマニラ事務所及び大使館表敬訪問日程打ち合せ 午後　13:45　現地派遣機関(外務省)表敬訪問及び内合せ
3	12　3	土	午前　10:00～14:30　同窓会打ち合せ及びオリエンティション　9人出席 夕　17:00　山形ホームステイグループ迎え　16人
4	12　4	日	午前　7:30　バギオ移動(チャターバスにて) 午後　12:30　バギオ着後野菜生産現場及び市場調査 夕　18:00　夕食会　帰国青年家族(87')及び現地ホームスティ家族
5	12　5	月	午前　9:00　山形グループマニラへ出発見送り後手工芸見学 10:30　ベンゲット州知事表敬 12:00　ベンゲット州知事主催昼食会 13:30　JOCV及び帰国青年職場視察(BSU)Benguet State University 18:00　BSU副学長主催夕食会 20:00　ホームスティ宅にて交流会
6	12　6	火	午前　9:25　マニラ移動 12:00　帰国青年及び山形グループ昼食会 午後　自主研修 夕　18:00　反省会(山形グループ及び帰国青年(87')))
7	12　7	水	午前　9:00～14:00　帰国青年職場訪問(IRRI・国際稲作研究センター　88'　3名) 帰途　モンテンルパ刑務所日本人墓地及びアメリカン墓地見学 夕　18:00　帰国青年夕食会(87')
8	12　8	木	終日　現地社会経済事情調査(マニラ周辺) 夕　帰国青年主催交歓会(87'－88'　来日青年9名)
9	12　9	金	終日　レポート作成及び自主研究 1)　帰国青年とマニラ周辺視察 夕　同窓会主催交歓会(84'－88'　21名)
10	12　10	土	午前　帰国準備 午後　マニラ発　14:25(PR432)成田着　19:15

1－3　主要面談者

(1)　ＪＩＣＡマニラ事務所表敬訪問

面接者　　宮本　守也マニラ事務所長

稲葉　　泰マニラ事務所次長

(2)　日本大使館表敬訪問（EMBASSY　of　JAPAN）

面接者　　松津　光威日本大使館（広報）担当官

中村　　日本大使館二等書記官

(3)　派遣機関（外務省）表敬訪問（DEPARTMNT　of　FOREIGN　AFFAIRS）

面接者　　Hon. Ambassador　RORA　TOLENTINO

Director－General

Asian & Pacific　Affairs（ASPAC）

Ms.　ERLINDA　Q. GAVINO

Assistant　Director

Japan　Desk（ASPAC）

(4)　ベンゲット州知事表敬訪問（BENGUET　PROVINCIAL　OFFICE）

面接者　　Mr.　HON. ANDRES　R. BUGNOSEN

Governor

Mr.　JAIME　PAUL　B. PANGANIBAN

Member, Provincial　Board

Committee　Chairman, Tourism

and　Public　Administration.

Mr.　ATTY　MANUEL　C. CUILAN

Board　Member

知事が多忙の為出張中であったが州議会員と懇談及び昼食会を開催していただいた。このベンゲット州より数名の日系関係の青年が各グループの招へい青年として来日している。

(5)　ベンゲット州立大学（BENGUET　STATE　UNIVERSITY）

面接者　　Mr.　CARLOS　T. Buasen, Ed. D.

Executive　Vice　President

学長がインドネシア出張中なので副学長が対応していただき、学内見学及び協力隊員現場及び86'来日青年（農村青年）職場見学（但し本人は退職済）し帰国青年の退職理由に対して解答は無かった。

(6)　国際稲作研究所（INTERNATIONAL　RICE　RESEACH　INSTTUTE）

面接者　　Mr.　ROMY　S. NECESARIO

Administrative Assistant

VISITORS SERVICE

広報担当者よりIRRIの概要説明(ビデオにて)

各青年(88' 農村青年グループにて来日)の職場を訪問し、それぞれの担当及び研究している所を視察した。

面接者	Mr.	RODOLFO YABUT REYES	土壌研究
	Mr.	ELEPANO ARNOLD	コンピューターシステム
	Mr.	VALDEZ SUSAN	昆虫研究

また稲作の品種改良の講義を受る。

面接者　Mr. W. RONNIE COFFMAN

2. 現地活動報告

2－1 意見交換内容及び帰国同窓会等の活動状況

活動として今後会員の相互の為に新聞等の発刊を考えたい、しかしJICAより金銭的援助がないと活動できない。又、主たる活動するメンバーが諸事情の為活発なる活動が現在は不可能である。しかし、日本青年来比の時は全面的にホームスティの紹介及び移動時の案内等の援助をする。

意見交換

当班のアフターケアーチームのメンバーについては各分野から構成しているので、それぞれの担当に関する意見の交換を行なった。現地プログラムに関しては報告より削除いたします。

同窓会役員打ち合せ会議出席者名簿

Mr. Edar Tomas Q. Auxilian	1985	Students (A)
Mrs. Flores Ma. Elizabeth F. Garcia	1984	Working youth
Mr. Generoso de Guzman Galonge	1985	Students (A)
Mr. Ariel M. Araza	1988	Students (A)
Mr. Francis Dimalanta	1988	Students (B)
Ms. Susan Relleve	1988	Agricultural
Ms. Ruby Sakai	1988	ASEAN Composite I
Mr. Eric David	1988	ASEAN Composite II
Mr. Dennis del Rosario	1988	Working youth
Ms. Saula Payumo	1988	Working youth

共通プログラム：

現プロと共プロとに同講義がある

情報として古いものである

講義の内容が選択出来ない（グループ毎のカテゴリーに分けて講義してほしい）

早稲田大学の先生だけでなくいろいろな大学の先生の講義を聞きたい

地方プログラムの前にパホーマンスの練習が出来ない（部屋の確保）

ホテルの対応が他の国の青年と差別している

ホームステイの選択の問題

都内、地方プログラム：

学生(A)合宿セミナーが短い、混合セミナー及び宿泊にしてほしい

学生(B)トピックスによっては時間が短い、多くの日本参加青年と討論したい

都内と地方の重複しないプログラムを組んで欲しい

施設訪問は事前に情報を提供して欲しい

ＪＩＣＡは事前に参加青年がどんな事を学びたいか、視察したいか調整してほしい（アプリケーションの利用）

グループによって食事の問題がある（アセ混）

設定テーマだけでなく自由テーマに時間をかけて

公務員として行政機関の視察をできるよう配慮して欲しい

勤労青年も農村青年同様その種の体験の機会を組んで欲しい（企業体験）

宿泊先は西洋式より日本式の畳の部屋が良い

ホームステイ：

ホームステイにガイドラインを与えて

土産の問題（高額現金の支給等）

ホームステイ先へのスクーリングをすべきだ（重要課題）

一人でも英語を話す人がいれば充実できた

期間は長い方が良い

余りにもフイリピン通のため自宅に帰ったみたいであった（一般の家庭を）

事前家族構成を知りたい（土産の関係）

視察旅行：

神社仏閣の視察に関し事前に目的説明がほしい

被爆者に是非会たかった（被爆者との懇談会を義務ずけては？）

日程がハードでホテルが毎日変る（荷物の問題）

富士山の登山がしたかった

国会議事堂の見学（議会の開催中）

その他：

日本青年とのアフターケアが十分でない（フェアウエルパーティ）

帰国時リムジンの利用及び空港送迎に関して日本青年の同行の許可

各グループのリーダーはEx-participantsから選出してほしい

フイリピンコーディネイターの利用について

参加者にCertificateを出してほしい（強い要望）

参加青年のフォローアップとしてPacific Friend の配布を

2－2　帰国青年との交流及び交歓会

毎日帰国青年が宿泊ホテルに来訪し交流を深めた

12/4　帰国青年家族及びホームステイ先家族と夕食懇談会

来日青年及び家族

Mr. RODOLFO Jr. SEVERO. ACOP（87'農村青年グループ）

Mr. EFREN GAUDIEL DELA CRUZ（87'農村青年グループ）

ホームステイ先家族

Dr. DOMINARDO NARVAEZ

12/8　帰国青年主催夕食懇談会（87' 88' 年農村青年グループ）

88' Mr. ISIDORO P. C. ROMERO Jr.

88' Ms. MARY SUSAN

88' Mr. GENDRANO GARMELO MENIORO

88' Ms. MA ELENA S. CERDON

88' Ms. ROSARIO DUERME CABAL

87' Mr. JUSUE B. ABADIES Jr.

88' Ms. KAREN BEATRIS ROSE DAZO

88' Ms. LIZADA MARIA LUZ CLAUDIO

88' Ms. NINA NATIVIDAD PANGAHAS

88' Ms. TUAZON MERCEDES SOCORRO L. B.

87' Mr. RODOLFO Jr. SEVERO ACOP

12/5 ベンゲット州知事主催昼食会（議会員等参加）

12/5 ベンゲット州立大学主催夕食懇談会（来日研修員等が参加）

12/9 同窓会主催夕食懇談会（84'～88'役員及び 86'～87'農村青年総計 30 名）

Mr. Edar Tomas Q. Auxilian	85 Students (A)
Mrs. Flores Ma. Elizabeth F. Garcia	84 Working youth
Mr. Generoso de Guzman Galonge	85 Students (A)
Mr. Ariel M. Araza	88 Students (A)
Mr. Francis Dimalanta	88 Students (B)
Ms. Ruby Sakai	88 ASEAN Composite I
Mr. Eric David	88 ASEAN Composite II
Mr. Dennis del Rosario	88 Working youth

Ms. Saula Payumo	88 Working youth
Ms. Marlynn M. Mendoza	87 Agriculture
Mr. Fedelino Fidel F. Malbas Jr.	87 Agriculture
Ms. Adoracion Omega Pilares	87 Agriculture
Ms. Maria Theresa M. Gendrano	86 Agriculture
Ms. Maria Vicenta Banguis	86 Agriculture

2－3　ホームステイ実施状況

帰国青年の所ですべきであったが地方（バギオ）の為住居の条件があわなかった

帰国青年が地元に3人の予定が一人はアメリカ留学、一人が職場を退職不明、一人は住宅条件で不可能であった。

同窓会役員名簿

氏　　名	役　職　名	派遣年／職種
Mrs. Benilda C. Arciaga	Crairman 議長	1985 ASEAN group I
Mr. Edar Tomas Q. Auxilian	Acting President 事務局長	1985 Students (A)
Mr. Francisco Garcia Jr.	Menber of the Board of Direct Chairman, Finance Committee 理事兼財務主任	
Mrs. Flores Ma. Elizabeth F. Garcia	Secretary, Chairman Secretarist 秘書兼事務局主任	1984 Working youth
Mr. Generoso de Guzman Galonge	Menber of the Board of Direct 理事	1985 Students (A)
Ms. Lolita Capco	Soccial Projects 特別事業担当	

連　絡　先

名　称：Phliippine Participants of the ASEAN-Japan Friendship Programme for the 21st Century Association Inc.

連絡先：Office of Asian and Pacific Affairs, Ministry of Foreign Affairs, Paper Faura Street, Ermita, Manila, Philippiness.

代表者：Mrs. Benilda C. Arciaga (Chairman)

3. 調査チーム参加者の感想

山形県企画調整部企画調整課
国際交流担当　　佐藤　諭

(1) 地方とフィリピンの掛け橋として

２１世紀への友情計画に参加した青年達と話し合って感じたのは、日本を訪れてから日本に対しての好意が深まり、特にホームステイをした地方には大きな愛着を持っているということだった。山形に滞在した青年達は、皆山形のファンになっていたし、北海道に行った青年は、北海道のファンになっていた。地方の国際交流を推進していくうえで、今後、彼らを滞在した地方とフィリピンとの掛け橋として位置付けることが重要であろう。

それを具現化していくためには、次のような方策が考えられる。

① 彼らを山形等地方の情報のフィリピンでの中継基地とするため、英文の地方広報紙・情報紙・観光案内等を国際交流協会あるいは地方受入団体、行政側が随時彼らに提供してはどうか。その地方についての理解をさらに深めるのに役立ち、また彼らの滞在経験とまじえてそれらの情報が、日本の一地方を、職場の同僚・家族・友人等に周知させる手助けとなる。

② 彼らをフィリピンの情報の日本への発信基地とする。

ＩＲＲＩ（International Rice Research Institute）を見学する機会があり（12月７日）、今年、山形を訪れたRudy，Ed，Susan に施設を案内してもらった。広大な敷地の中に充実した研究施設が立ち並び、世界中から多くの科学者が稲の研究に従事しているのを見て、山形の農業試験場しか知らない私にとっては大きな驚きだった。ＩＲＲＩをはじめさまざまな職場から派遣されたフィリピン青年から、私達が学ぶものがかなりあると感じた。

(2) 日本滞在中の研修内容について

フィリピンの今後の農業形態を左右する農地改革、CARP（Comprehensive Agrarian Reform Program）はフィリピン国内で大きな関心を呼んでいる。特に２１世紀プログラムで来日する農村青年にとっては、議論のつきない問題となっている。

彼らの議論の材料として付け加えたいものの１つに、日本の農地改革の歴史がある。戦後、強制的小作地を小作人に売り渡し、小規模の自作農を数多く生み出した農地解放が、日本の農業構造を形作っただけでなく、経済成長にどのような影響を及ぼしたかを学ぶことは、フィリピン農村青年にとって得るものが大きいであろう。そういった意味において、日本滞在中のプログラムに，日本の農地解放に関する講義を入れてみるのもおもしろいと思う。

(3) 参加者のバックグラウンドの把握について

同窓会との会合で、プログラムの問題として彼らから指摘されたものの一つに、自分の

興味に合致しない施設等を見学しなければならなかったということがあった。参加者すべてを満足させるようなプログラムを組むことは、そもそも不可能だろうが、各自のバックグラウンドを理解し、来日前に各自の情報を得て見学先を決定すれば、おおむねの満足を得れるのではなかろうか。勤務先の概略及び従事している仕事の内容、希望する見学先といった情報が必要だと思われる。もちろん現在のメンバー選考手続きが、相手国に任せられており、時間的に参加者の決定から来日まで余裕のないこともあって、プログラムの作成までまにあわないというのが現状のようなので、選考過程を早めることもあわせて望まれる。

(4) ホストファミリーと参加者の交流について

① 外国青年を初めて自宅に招く者、他国の家庭に初めて宿泊する者双方にとって、ホームステイが始まるまでは不安が先にたつようで、何人かのフィリピン青年は神経質になり、できるならばホームステイをしないですめばと願っていたとのこと。ホームスティが終わってしまうと、二泊あるいは三泊いっしょに過ごしただけではお互いわかりあえないから、もっと長い期間ホームステイを延ばしてほしいと口々に言うのを聞くと、交流の最高の形はホームステイだという印象を強くする。

宿泊側と受入れ側の事前の不安を取除き、相互の理解を深めておくためには、来日前に文通しそれぞれの情報を交換しておくべきだと感じた。そのためにも、参加者の選考が現在より早く終えていることが、前提条件となる。

② われわれの調査団と重なるように、山形からホストファミリーの一行１６人が、山形県青年海外協力協会の企画で１２月３日から１２月７日までフィリピンを訪れ、一部、私達の途中の行程と同じくした。彼らのなかには、ホームステイしたフィリピン青年の自宅に招かれたものもおり、青年達との再会を喜んでいた。またフィリピンの地を踏んだことによって、青年達との親近感がより増していたようだった。この貴重な機会を提供した県の協力協会の尽力には、頭のさがる思いである。今後も県の協力協会の指導により、山形県のホストファミリーとフィリピン青年の交流は着実に進んでいくであろう。

③ 外国の青年達との交流によって得られる喜びは、実際にホームステイ等を体験しなければ味わえないものだろうと思う。この喜びを、一部の人たちのものとしてしまっておかずに、より広く県民のものとするためには、ホストファミリーを募る際に、経験者だけに声をかけることなく、未体験の家庭にも機会を提供することが大切だと考える。

(5) ベンゲット州（Benguet）での農業視察について

ベンゲット州では、小規模な耕作を行っている農家の耕作状況と、ベンゲット州立大学（Benguet State Unv.）を視察することができた。（１２月４日、１２月５日）

前月、襲来した台風のため、大部分の作物が被害を受けたとのことで、生育している野菜・果物があまり見れなかった。当州は高地にあるため、マニラの野菜・果樹生産基地と

なっている。'87年に来県したメンバーの一人Rodolfo S. Acop Jr.（Rudy）は、野菜等の仲買業を営んでおり、彼のはなしでは、台風の被害による品不足のため、農産物は最近、高値で取引されているとのことだった。あれほど多量の農産物を扱いながら、どうして我が家にまで回ってこないのかと、奥さんからいやみを言われていると苦笑する。仲買人の多くは中国系であり、彼らが農産物価格を左右しているという不平を、何人かから聞いた。特に野菜の値段はかなり変動がはげしく、１０倍前後の値動きをみせるため、高値で安定している果樹に生産の重点を移す農家が増え、ベンゲット州立大学でも野菜より果樹の農業技術指導に積極的であった。

ベンゲット州の州都バギオ（Baguio）は、標高約1,５００メートルに位置する。市街地周辺の宅地化が進んできたため、近傍農地が次々と宅地に変貌していた。農地は焼き畑により山間部に場所を移しており、保水力の豊富な森林が消失していくことによるしっぺがえしが危惧された。今回見学したのは、市街地の近傍農地であり、農地の価格が高騰しているため、ここでは、採算の取れるイチゴ・かんきつ類等の果樹を中心に栽培しており、野菜は山間部で栽培しているとのこと。

'88の団員であったRodolfo Reyes（Rudy）、Susan Valdez，Edgardo Mendoza(Ed)の三名がＩＲＲＩに勤務しており、われわれを案内してくれた。Rudyは土壌課でコンピューターを担当している。化学肥料は途上国の農家にとっては高価なため、それに代わるものとして、アゾラや藍藻等、空気中の窒素をその中に固定する性質のある生物を、土壌課では研究していた。Susanは昆虫学課に席をおき、稲の害虫の研究に従事している。Edは最近ＩＲＲＩに就職し、大型コンピューター室で働いている。

ここでは、米が世界の食卓のなかに占める地位を再認識した。米は、第３世界の多くの人にとって、主食になっており、世界の３分の１の人々が、米を常食としている。地上の人口の半分以上が生活しているアジアでは、世界の９２％の稲を栽培している。また、今日ではアフリカにおいて、稲の自己生産を増強する必要に迫られている。世界市場で取引される米の４０％は、アフリカに向かっており、それは外貨準備高の著しい流出を意味する。ＩＲＲＩの目標とするのは、農民が稲をより多く生産できるよう援助することである。

今回見学した施設のなかで、最も興味深かったのは、世界中の稲の品種を貯蔵している低温貯蔵室であった。古来からある原種から、日に日に品種改良によって生み出される新品種まで豊富に貯えておき、各国の研究者の要請に応じて、無料で種を提供しているとのこと。氷点下で保存している貯蔵庫・缶詰にして保存している貯蔵庫に、種子がびっしり並んでいた。

(6) 表敬訪問　１２月２日（金）

ＪＩＣＡマニラ事務所　所長

日本大使館　松津光威

フィリピン外務省アジア・太平洋局長

(7)　同窓会との会合　１２月３日（土）

出席者　各分野（農村・学生・公務員・公務員・混成等）の代表者約１０名

ＪＩＣＡマニラ事務所　稲葉　泰

調査団５名

議　題　２１世紀友情計画をよりよくするための提案

討議内容

おもに、出発前のプログラム及び中央プログラムについて、意見が出された。地方プログラムについてはおおむね好評であり、特にホームステイは好評であった。

地方プログラムについての提案等

・ある地方では１家庭に２人がホームステイしたので、１家庭に１人としてほしい。

・ホストファミリーとの理解を深めるために、ホームステイを１週間くらいに延ばしてほしい。

・ある地方では、ホストファミリーが男性一人で、そこに女性が泊まったところ、彼が酔って夜、彼女の部屋に入ってきたため、３晩寝れなかったということがあった。彼には、大学生の娘がいて、受け入れの時期には夏休みのため帰省するとのことだったが、結局来なかった。こういうことを防ぐために、ホストファミリーの選考は、地元引受け団体とＪＩＣＡの２段階で慎重に行ってほしい。

・英語のできる人が、少なくともホストファミリーに１人いるようにしてもらいたいという要望が、この会議で１名から出されたが、日本語のできるフィリピン青年を送るのも代案の１つだという冗談をはじめ、言葉の障壁は問題ではないという多くの声から打ち消された。

・学生グループからは、日本の学生と討論する機会がもっとほしかったという要望があった。

同窓会の活動について

同窓会の会報を発行したいが、金銭的にむずかしいということから、ＪＩＣＡに無心していた。また同窓会の核となる青年の何人かがヨーロッパ等海外に留学しているため、まとまりがつかないというのも、同窓会の活動が低迷している理由の一つのようである。

１２月１１日（日）には、全同窓会のメンバーを集めた催しが、ＪＩＣＡマニラ事務所が音頭をとって行われることになっていた。総勢で７００名くらいになりそうであった。

(8) 付　記

今回のフィリピン訪問での最大の収穫は、多くのフィリピン青年と話ができたことだ。

山形県を今年、訪れた農村青年グループのうちBojie，Chito，Chito，Ellen，Karen，Luchi，Nina，Merciの8名が、私達一行を夕食会に招待してくれた（12月8日）。同窓会ではパーティーを催してくれたので（12月9日）、新しい友人を得ることができた。

また、会合・表敬訪問等の段取りをつけていただいた稲葉泰さんをはじめ、JICAマニラ事務所の方々には、たいへんお世話になった。たくさんのフィリピンの友人たちのご協力によって、私にとって初めてのフィリピンの旅は、忘れることのできない貴重な体験となった。

（社）青年海外協力協会

木村　勤

今回、標記事業アフターケア調査団員として参加し、以下にその報告を述べる。

昭和63年12月1日成田を出発し12月10日まで9泊10日間の日程にて基本スケジュールに沿って調査を実施してきた。まずスケジュールを作成するにあたり、私を除いて初じめてのフィリピン訪問なので基本スケジュール及び他の参加者の事を考慮し作成しなければならない事が大変であった。特に参加者の内訳が地方行政機関、地方受入実施団体、合宿セミナー参加者、ホームステイ受入家族、中央実施団体という構成であり、それぞれの分野、それぞれの認識を持っての参加であったため全員の希望するスケジュールにまとめる点で苦労した。先ずは日程に従って所見を述べたいと思う。12月1日マニラ空港に到着、JICAマニラ事務所の担当者の迎えを受けホテルに直行。ホテルチェックイン後、荷物の整理等で夕方まで時間を費やした。JICAマニラ事務所長主催の夕食会が予定されていたが都合で稲葉次長に変更になり、我々団員に対して心暖かいもてなしをしていただいた。翌、12月2日午前、JICAマニラ事務所を訪問し、宮本所長とこれからの青年招聘事業の在り方及びJICA事務所が現在抱えておられる問題について話し合がなされた。その後、日本大使館青年招聘担当である松津担当官を表敬訪問し様々な話し会いの中で同担当官は、現在フィリピン側が問題意識を持っていることに触れられた。

我々実施協力団体として非常に勉強になった。同日午後、JICA稲葉次長と共に派遣担当機関である外務省アジア・太平洋局の長であるローラ・トレンチノ局長を表敬訪問し、我々団員の来比の目的及び今後の青年招聘事業に関し友好的に会談を持つことができた。また、外務省の担当者の中に青年招聘事業のグループの一員として来日した青年も何人かおり、フィリピン側のこの事業に対する意気込みが感じられた。

12月3日、宿泊先のマンダリンホテルにて同窓会の役員及びそれぞれのグループ代表(10名）との懇談会が開催された。この懇談会のには全員が各々の下記の役割りを持って参加して

いるのでそれらについて話し合う事になった。

(1) 現地プログラム

(2) 共通プログラム

(3) 都内・地方プログラム

(4) ホームステイ

(5) 視察プログラム

この内我々に関した事で、今後我々がプログラムを作成するにあたり留意すべき事柄をいくつか述べてみたいとおもう。

＊都内・地方プログラム＊

都内と地方のプログラム内容の重複

アプリケーションの利用

施設訪問等には事前に情報の提供

より多くの日本青年との交流ができるように各カテゴリーに合った視察訪問

＊ホームステイ＊

ホームステイ受入先にガイドラインを与えて

お土産の問題

ホームステイにスクーリングを

期間の延長

事前情報提供（家族構成等）

＊視察旅行＊

神社仏閣視察に関し目的等の事前情報提供

被爆者との懇談会の義務付け

＊その他＊

今後の各グループのリーダーには国青年の中から選出して欲しい

参加青年に身分証明書の交付（強い要望）

日本青年との継続的友好親善促進のアフターケアを十分に　　以上

上記の事は各実施協力団体としてエバリエーションでも十分に把握していたつもりではあるが、彼等が各々の問題として考えまた同時に実施協力団体としても今後の青年招聘事業の実施にあたり留意していきたい要望の一つ一つとして、今後のプログラム作成に十分配慮すべき事であると思う。

この同窓会の役員及び各グループの代表者との話し合いを通じて実施協力団体の在り方及び地方実施協力団体との連絡が如何に重要であるかを改めて考えさせられた。４・５年度目フィリピン農村青年グループの地方プログラム実施協力団体である山形県青年海外協力協会のホームステイの受入家族の方々１６名が、今後の受入実施の為の事前現地視察及び再交流を目的と

して１２月３日より７日まで４泊５日の日程で来比した。一行の大半は初じめてのフィリピン訪問である。当団員も山形グループと数日間の日程を同行した。

１２月４日、早朝貸切バスにてバギオに向かう。バス利用についてはマニラ市内（ローランド）からバギオ市内（山岳地方）までの間約３５０㎞の間、途中マニラ市内から離れるに従いフィリピンの縮図が見えて来る。やはりホームステイの方々にとってマニラ市内の華やかさと比べその大きな違いが相当のショックであったようである。途中、昼食を取るためレストランに入る。初めての現地食、一見抵抗なく食べているかに見られたが、数名はやはり食が進まなかったとのこと。約５時間で目的地のバギオに到着。早速ホテルに行き、８７年度に来日した青年ルディ・アコップが我々一行を迎えてくれた。約１年半ぶりの再会で山形グループの皆さんも感激がひとしおの様子であった。またバギオでの手配を全べて行ってくれたジミー（私が協力隊員時代のホームステイ先の息子ジミー・ナルヴァエズ）とルディとの案内で、トリニダットの農場及びバギオ市内のマーケット等を視察した。山形グループの皆さんは農業従事者なので非常に熱心に見学をしていた。また当団員も今後の受入実施にあたりフィリピンの農業事情を把握する上で非常に参考になったと思う。此所、バギオのマーケットは肉、野菜、魚、米等全てがあり市場調査に非常に役に立った。夕食は帰国青年の両親家族及びホームステイ先の両親家族共に懇親会を兼ねて夕食会が行われた。

１２月５日早朝、山形グループはマニラに戻るためバギオの飛行場へ、当団は朝食後市内にあるハンディキャプの人々が製法している銀細工房視察の後、ベンゲット州知事訪問のためキャピタルオフィスへ向かった。知事は多忙のため留守であったが州議会議長が我々一行を歓迎してくれた。ベンゲット州の概要のブリーフィングの後、昼食会を開催して下さった。

午後、８６年度来日青年の職場であるＢＳＵ（ベンゲット総合大学）を表敬訪問した。学長がインドネシア出張のため不在であったが副学長が当団を歓迎してくださり、研修員として来日したことのある講師を案内役とし、構内を十分に見学させていただいた。ただ、青年招聘にて来日した青年が既に退職しており再会できなかったのがやはり残念であった。当団としては彼の退職理由について興味を持ったが大学側からは多くは聞き出せなかった。夜、副学長が当団のためにＢＳＵの職員（来日教師、助手）と学生を一堂に集めそれに現地の協力隊員、ベンゲット州知事、副知事はじめ多数の議会員と共に歓迎会を開催してくださった。心からの歓迎ぶりに頭がさがる思いであった。歓迎会の後ホームステイに行き、『両親』と心ゆくまで語り飲み明した。当団としてはできれば来日青年の家にホームステイしたかったが住宅事情に加えて同窓会との連絡不足のため当初の目的を達成できなかった事が残念である。しかしマニラ周辺でのホームステイが良いとは思うが、本来のホームステイとは掛離れたものではないだろうかという疑問は残る。

１２月６日午後、バギオでのスケジュールを終了したので、半日早めに飛行機にてマニラに下りることに変更した。費用の面で国内線利用は考えていなかったが、時間的ロスを考えて全

員一致で飛行機利用にした。マニラ到着後山形グループ、及び来日青年と共に昼食を取りホテルにて休憩した。

１２月７日早朝、山形グループ帰国。当団は来日青年（８８年度農村青年３名）が勤務するＩＲＲＩに向け出発。約１時間４０分でＩＲＲＩに到着し、先ずは広報担当者よりビデオによるＩＲＲＩの概要説明があった。その後、に８８年度農村青年で来日したリーダーのルディ及びスーザンの両名の案内で各セクションを視察した。続いてルディが勤務する土壌課、スーザンが勤務する昆虫学課、エドが勤務する大型コンピュータなどの施設見学をした。更にルディが是非にと言うことで稲作の品種改良室を訪問し、約１時間の講義を受講する。ＩＲＲＩの研究施設の規模、内容共にレベルは相当に高く、この研究所にて勤務経験のある青年が来日した場合、日本にける視察関係プログラムでは物足りないのではないだろうかと懸念される。いずれにしても非常に勉強になった。

１２月８日終日、市場経済事情調査を行った。久し振りの休日といった感じで，フィリピンの経済情況及び歴史をじっくり学び充実した１日であった。

１２月９日（終日自由）ある団員は来日青年とマニラ近郊へ観光に、ある団員は買い物，ある団員は青年の家族と再交流にとそれぞれ自由時間を満喫した。

夕方、フィリピン同窓会主催による交流会が開催された。各グループ代表及び同窓会役員等約３０数名が出席して再び友好を深めた。開催時間は７時の予定であったが、比側が集ったのが９時頃であった。自己紹介で始まり、当団メンバーもパホーマンスを披露し楽しく有意義に過した。今後の同窓会活動に期待をしたいと思う。

１２月１０日午後、数人の来日青年にお別れを告げマニラを後にした。今回のアフターケア調査に参加したメンバーひとりひとりが、それぞれの立場で理解を深め、今回得た多くの情報を基に今後、合宿セミナー、ホームステイ受け入れなどの地方プログラムあるいは行政関係プログラムなど本事業全般に亘って、来日青年の希望にかなった効果的なプログラム作成に携わっていく事であろう。

最後に当調査団に対し全ての面でＪＩＣＡマニラ事務所の皆様の全面的なご支援とご協力を得たおかげで本調査を無事成功させることができ、厚く感謝を申し上げます。

清水利泰

この度国際交流に参加しての１０日間における此国滞在で私が経験し感じた事を書く事が出来た事は、国際協力事業団の皆様、ＯＢの皆様、そして、私の様な語学力のない者を遠率して下さいました木村先生始め、フィリピン在住の皆様、政府役員、講師、学生、ホームステーを引受けて下さった御家族の皆様には、この紙面を持って御礼申し上げさせていただきます。

アフターケア調査報告書内容については、私と同一行動をとられました佐藤さん、斉藤さん、

横田さんの、英語の優秀方々におまかせいただきまして、私なりに感じ取りました事を報告させていただきます。

(1) 経済及び農業（国際稲研究所）

フィリピンの人口の$\frac{2}{3}$以上は農業、漁業、林業に携われているといわれ、農産物では最も主要な物は米であり品種改良、栽培方法、特に同研究所における他国への品種改良、種子の提供、国内での消費を上回り自給自足を達成した事は喜ばしい事である。（私の近くにも県の試験所があり、年に５～６回足を運びアドバイスを受けますが、ペーパー講演だけです。）

稲の品種改良、交配の手ほどき、実際にこの目で見られた事は、特に私自身最高の喜びです。又、帰国青年の職場訪問も行ない、三人の青年にお会いした事も私自身農業に取りくんでいる友人、或は研究所に勤めている私の友達であるという感じを受けました。

８８年度の日本の稲作農家も冷害により種子の購入も心配されている今日、もし３年連続冷害に見舞れたならば、フィリピン稲研究所より逆に種子を提供してもらわねばならない時期が来るかも知れません。

この研究所への援助は、日本政府はもちろん、全世界で種子の確保を行なっていかなければならない事を痛感させられました。

(2) 野菜について

食卓にレタスの配膳とは驚いてしまった。と言うのは、暑い国でのレタス栽培は技術を要するのです。２２℃以上は花芽の分化、又その反対に、８０℃以下でも結球しにくく花芽の分化をし花が咲いてしまうのです。そのレタスを見事に栽培するには、やはり協力隊の技術ではなかろうかと思われます。

人参、大根、ササゲ、その他数多くの野菜が店頭に並べてあるのには驚きました。（バギオの市場、マニラーのスーパーマーケットでの視察）

特に例を上げて申し上げれば、レタス、人参、カブ等は、高温と土質の選定、有機質の投入、農薬の使用等難しいと思います。

今後色々な野菜に挑戦して見てはいかがですか。？

(3) 品種改良と農業の意欲

◎バギオにおける夕食会に参加して（ベンゲート州庁及び行政関係参加）

行政関係各位のお話を聞いて、野菜の種子購入は日本からお買上げとの事、我々農業者も種子の購入は高いのです。

例を申し上げますと	A	胡瓜種子３５０粒	4,８００円
	B	マスクメロン１００粒	8,０００円
	C	茄　子　２０ml	4,５００円

やはり一代交配＋バイテク使用法を取り入れている関係もあるかと思います。

（バイテクの設備費だけでも何億と経費が重むわけです。）

ですからフィリピンにおいても、稲研究所的な、バイテク、品質改良、土質学、病理学、その他必要に応じて、あらゆる分野にまたがる農事学科を設置すれば、化学、技術者の養成も出来得るし、当然生産者にも意欲が出きる事と思います。

ただし農地解放がない限り生産者の意欲が出来ないのは当然かも知れません。

現に、中国は農民に一定の土地を当えて意欲を燃やし大きく前進し、発展をなしとげております。

又、ソビエトも少々の耕地を与え、与えられた土地から3～5倍の収量を上げているのです。フィリピン国でも農民と地主、そして社会における貧富の差を是正していくためにも、国民はもちろん、行政面でも働きかけ少しでも縮めていかなければならないと思います。

(4) 福祉に関する感想

セントルイス大学及びイースタンスクールを視察して私自身、この二つの学校や、大学は、日本の工学科、繊維科に属するものと考え、フィリピンの特産品で最も名高い麻が衣料の素材として使用されて居るバロン、タガログ女性のドレス等に、又、銀細工は、ホテルの装飾品や、古代ヨーロッパや、スペインの器を思い浮べ、この国でもすばらしい技術を持ち、独得な技術の修得を行なう学校であろうと思い込んでいた。

視察をして見ますと、全く違った厚生指導的、或は、授産施設的な学校に思いました。

でも、私自身、高3年の時期に耕耘機による片足切断の障害者であり、身障者協会の活動も行なって来た一人として、フィリピン国にも、日本と同じ、厚生指導所的な学校、もしくは、授産施設を建設し、数多くの障害者の働く場所、意欲を見い出す事が出来るものと私自身両手を上げて賛成する者です。

バギオのマーケットの路上、マニラ市内の自動車が往来する中、手を伸ばして金銭をねだる姿、健全な人々さえも働き場所がない今日の全世界です。政府として障害者に対して愛の手を差し伸べる事を期待致します。

(5) 産業と社会

フィリピンの産業、対外輸出品では、木材鉱物資源（鉄銅、硫黄、大理石、燐鉱）農産物では、バナナ、パイナップル、麻、等数多くの品を原形のままに輸出を行なっている現状です。ですから数多くの資源を加工し商品化輸出をすべきかと思われます。

バギオでの農産加工もその一つです。ピーナツの加工も私達日本の加工と違った味覚です。

失業率も高いといわれているフィリピン国内の労働者、うまく利用すべき事は、これらの資源を加工し、商品化すべきかと思われます。現に日本の企業も、韓国、台湾、タイ、シンガポール…等と進出しその各国の成長をなしとげております。

同じアジア経済の新時代でも、フィリピンと同じ点をいくつか上げてみますと、シンガポールと、此国は多民族（中国、マレーシア、インド等）であろう。それだけにも教育にも熱心であろうし、エリート養成が行なわれていると考えられます。

その人材を最大に利用すれば少しでも失業率と、産業開発とつながるかと思います。

現にシンガポールは失業率2.3％と完全雇用に近い状態になって来ています。逆にマレーシアとか、比国からの労働者問題が浮上している現状で外国人ワーカを締め出すとまで声明を出している状態です。

上記の点からフィリピン国内の労働者の堀起しとし、日本からの資金援助だけでなく、民間企業（外資系企業）も取り入れ、国内の労働者失業問題も少々解決するのではないか？

それには、私は次の点をかかげて見ました。

① 政治的に安定した国造りを目ざさねばならない。官史の汚職……特に私自身、警察官のチップの要求には驚いてしまった。（日本国内では絶対にありえない）官史の汚職には目を光らせなければならないし、当然刑罰を与えなければならないでしょう。

② マニラ周辺での港湾設備

③ 工業団地の造成、当然道路の整備

④ 投資奨励地域制度を設けて税制上の特典を盛り込む。

⑤ プロジェクトチームを組織し、日本企業だけでなく、諸外国の勤勉さも研究

⑥ 電力の確保

この様な事が発展国の基本になるかと思います。!!

(6) 社　会

マニラ空港に降り立った私、空港でのチェック、何か私の小さい頃の日本人の引揚者の様な感じがしてなりません。

というのは、何の気なしに入って来る人々身動きの出来ない程の人の山、職員以外の人も何か仕事を手伝うかの様に……私の見た自転車置場かと思った所が人の山、何のために来ているかと考えざる得なかった。自動車の往来、自動車の警笛、高速自動車道での警笛、なぜ鳴すのか？自分にも分らなかった。日本では絶対自動車の車検はパスしないだろうと思われる車が、立派に走っているではないか、日本の様に使い捨の国と違って自動車に限らず、もっと物を大切にする心構えを我々もフィリピン人から学び取るべきである。

さらに印象深い事は、農村部或は山間部を通り果物店に立ち寄った時の事、男女とわず大人から子供まで話しかけて来る。その時の彼らの目が美しい事に驚きました。本当のフィリピンの良さは、ここから始まるのではないか！、国際都市マニラにおいてもデパート内、帰国青年達、レストラン内においても同様な感じかたを致しました。同じアジア人、言葉が違っても心が通じる気持は誰一人と同じです。

(7) 観光と衛生

大都市マニラ空港へ着いてから２０分位でホテルに着く、なんとなく排気ガスの白い、道路周辺には空かん、紙くず等、大都市フィリピンの玄関と言われて居る空港、もっと自治体或は、行政面で美化運動をし、観光客の乗り入れに気をくばって下されば と思います。800

万以上の大都市の人口をかかえての交通量、特に中心街にいては横断陸橋、或は地下道等を建設すれば歩行はもちろん、交通渋滞の解消をも図られる事と思います。

フィリピン国内においても以前申した様に車の検査をきちんと整え、公害の少ない快適な環境にて観光客を受け入れるべきかと思います。

ホテルの数、客室の良さ……リサール公園、イントラムサンチャゴ要塞、数々の寺院、マラカニヤン宮殿、米軍記念墓地、ミンドロ島、ビサヤ諸島、セブ島、数々の諸島と、それにつらねての日本では味わえられぬスキュバダイビング、数々のリゾート、そして安心して飲める上水道の設備、下水道、側溝の建設等。

空港ロビー、ホテルのロビーには観光案内、パンフレット等（国際稲研究所の視察、日本語のパンフレット、ビデオ）を用意すれば申し分なく思います。

日本と違い、青空があり、空気があり、太陽があり、音楽があり、人とのふれあいがあり、澄みきった海があり、自然があり、ロマンがあり、くだものがうまく、料理がおいしい

帰国青年達よあなたの国です

いつかまた合いましょう。

成田市農協　　横田直彦

『参加動機』

昭和６１年７月青年海外協力協会の木村氏より、２１世紀のための友情計画として、フィリピン農村青年約２０名の合宿セミナーを９月に成田で行いたいので、日本の農業協同組合について講師を願いたい、という話があり、当時農協の企画管理部で全般的な仕事をしていた私のところに話があり、引受けたのがきっかけで、以後６２年度、６３年度と３年間毎年千葉の合宿セミナーに参加させていただきました。

フィリピンの生活、農業事情等わからないで農協の説明をしていたのであまり役立った様に思われませんでしたが、国際交流の場として、農協職員数人を毎年同伴させていただき、良い経験となりました。

今回この計画が５ケ年を経過したということで、青年海外協力協会より、これまでの研修の成果と、６４年度から継続するにあたっての研修計画の改善及び帰国青年、現地青年達へのアフターケア調査を行うので参加できないか、という連絡をいただき、毎年フィリピン青年達の合宿セミナーに参加していて、フィリピンのことを知らなくてはと思い、農協より休暇をいただき参加いたしました。

１日目、「フィリピンの印象」

成田発１０時１５分、４時間半程でマニラ空港に到着、飛行機から見たフィリピンは乾季であるにもかかわらず、洪水で水につかったままの地域があるのには驚いた。

又、空港周辺には職もなくただ茫然と昇降客をながめている人々があふれており大変困難し

ていた。

失業者が多く大変貧しい生活をしている様な感じがしました。

空港でJICA事務所の人からフィリピンでの注意事項の連絡があり、その内容は、日本では想像のつかないことばかりであつた。

2日目、「JICAオフィス、日本大使館、外務省表敬訪問」。

JICAオフィスは日本大使館の中にあり、その周囲には、現地人が日本へ行く為のビザを取得するための長い列ができており、連日混雑しているそうである。

日本の人気度がうかがえた。

所長との話では、フィリピン青年が他の青年招へいグループと差別されたと感じている者がおり、大変心配しておられた。

日本とフィリピンの生活、習慣の違いからきているものと思われるが、その誤解を解くことも私達の使命である。

日本大使館においてもJICA所長の言っておられた差別についての注意があった。

外務省では、アジア大平洋局長（女性大使）、及び日本韓国担当課長代理を表敬訪問、これは形式的なあいさつですむ。

3日目、「同窓会メンバーとオリエンティション」

過去5年間にこの計画にフィリピンから、参加した人達の各グループの代表者が9人程ホテルに集まり、これまでの反省点と今後の改善点について、ディスカッションを行いました。

内容としては、(1)現地プログラムと共通プログラムに同じ講義がある。(2)同じ大学教授のだけでなくいろいろな大学教授の講義を聞きたい。(3)ホテルで他の国の青年と差別をしている。(4)都内と地方プログラムで重複しているものがある。(5)企業等の職場体験をしてみたい。(6)ホームスティ先での言葉の問題。その他多数の意見が出されたが、私としてはフィリピン農村青年グループの合宿セミナーのみにしか参加していないので、彼らの言っていることに対して理解できないことが多くディスカッションについては、何も言うことはありません。

ただ今後の計画に彼らの意見を一つでも、多くとり入れ、反映してやって欲しいと思います。

4日目、「バギオへ移動」

昨夜フィリピンに到着した、山形のホームスティ受入グループ16名と、チャーターバスにてバギオへ移動。

バギオでは、イースタン・ハイスクール（職業訓練学校）にて織物工場及びマーケット（市場）を視察し、土産物等購入し物価の安いことに、驚ろいた。

又、バギオは高原地帯の為野菜類の生産地となっており、農場を見学したが、単価の安い野菜は、もっと北部の山岳地帯の方に移り現在は単価の高い苺の生産がふえているということである。

これは農地が大変値上がりしていることを意味しており、日本では考えられないことだが、

２～３反歩の土地を持っている人は、１～２人の使用人を雇い農業をしているということで、いかに労働力が安く、機械、牛等が高いものであることを思い知らされました。

夕食はバギオ市内の中華料理店にて、バギオ地区の同窓生と山形グループ全員で、交歓会を行いました。

５日目、「ベンケット州庁・農業大学訪問」。

今回同行した木村氏が２０年前に、この地に青年海外協力隊員として来ており、州庁関係者ともよく知っており、昼は州知事主催の昼食会、夜は州立農業大学副学長主催の夕食会と大変な歓迎でした。

又現在も協力隊員がこの大学に１名おり、日本から指導された作物を除々に自分達のものにしている様であった。

ホームスティは当初同窓生の家庭を予定しておりましたが、地方の為住宅条件があわず、木村氏が協力隊時代に世話になった家庭に全員でホームスティした。

この家庭は銀行・雑貨店を経営し、親は開業医師であり、ベンケット地区では有力者であり、いろいろな場所を案内してくれたり、おいしいごちそうを出してくれたりして、大変歓迎してくれました。

６日目、「バギオからマニラへ移動」。

移動は当初バスの予定であったが、飛行機の切符がとれたので、早くマニラに帰ることができた。

マニラで前日別れた山形グループと昼食をいっしょにとり、午後は各自自由行動とし、マニラ市内のマーケット等買物をする。

夕食は山形グループ及び帰国青年数名といっしょに海鮮料理を食べました。

７日目、「帰国青年職場訪問」。

マニラから２時間程車で南に行った所、ロスバニオスという場所に広大な土地に国際稲作研究所（ＩＲＲＩ）があった。

ここには帰国青年三名が勤務しており、我々を案内説明をしてくれました。

この研究所はイネの優良品種を育成するとともに、その生産力を十分に発揮させる栽培技術を確立することにあり、世界人口の1／3を占める１５億を越す人々の主食であるコメの研究をしており、世界最大の規模で、現在世界に１２万種あるといわれる品種のうち７万5,０００種以上を保有している。

ここは日本の農業試験場をもっと大規模で近代的にしたものであり、品種改良や病害虫の研究が大変進んでおりました。

帰路モンテンルパの日本人墓地とアメリカン墓地を見学し、夕食はマニラ市内のレストランにて、民族舞踊を見ながらフィリピン料理をおいしくいただきました。

８日目、「現地社会経済事情調査」。

午前中マラカニアン宮殿・リサール公園・ポートサンチャゴ・チャイナガーデン等を見学、午後は市内のデパートにて土産物の買物をする。

夕食は、６２年、６３年に日本にきた農業青年グループ１０名程が主催となり交歓会を開らいてくれ、日本に行った時の思出話に花が咲き、楽しいひとときをすごしました。

「９日目」、マニラ周辺視察。

帰国青年といっしょに農村地帯を視察、パイナップル畑、ココナツ畑、パパイヤ畑、マンゴ畑等見学し、純農村地帯でけしきのよいタガイ・タイへ行き、日本人がマッシュルームを作っている所へ行きました。

午後からはマニラへ帰り、帰国青年といっしょにデパートへ土産物を買いに行きました。

夜は帰国青年主催のホームパーティをしていただき夜おそくまで楽しく、歌をうたったり話をしてすごしました。

「１０日目」、帰国

午前中帰国準備をし、マニラ発１４時２５分のフィリピンエアーにて帰国する。

「まとめ」

マニラ空港に到着した時ＪＩＣＡの人より注意事項のメモをいただき読んだ時は、大変治安が悪く物騒なところだと感じましたが、最初に注意を受けたことと、ＪＩＣＡメンバーの人が毎日ガイドをしてくれましたので、全員何事もなく無事予定の計画を終了いたしました。

私達の当初の目的である帰国青年に対するアフターケアと今後の計画の改善点については、帰国青年達との毎日の交流及び交歓会を通じて大変意義のあるものとなったと思います。

私にとってもなまのフィリピンを見ることができ今後の国際交流に役立つものと思われます。

又、今回この計画に私を参加させていただき大変ありがとうございました。それから、毎日私達を案内して下さいましたＪＩＣＡの人達にお礼を申し上げます。

以　上

山形県青年海外協力協会

斎藤栄司

１２月１日、あこがれのフィリピンに到着、機内アナウンスによれば気温は３２℃とのこと、山形を出る時は真っ白な雪景色が見えていたのに、数時間飛行機に乗るだけで真夏の世界にやってこれるのであるから、地球も小さくなったものだと改めて感じる。空港から町に出てまず感じたことは、フィリピンという国は思ったより豊かな国であるということ。走っている車は予想以上に新しいし、それらの車の大半はアルミホイールをはいているではないか。しかも山形ではそんなに見かけないメルセデスベンツがやたらと多い。ホテルに到着してみると、やはり玄関前には４・５台のベンツがたむろしている。これは山形などよりよほど豊かな国なのではないかと思ってしまう。

しかし、一歩ホテルを出たところには竹で編んだ塀を張り巡らし、その中で着のみ着のままの生活をしているような人々の姿があった。豊かさのすぐ足元に貧しさが漂っている途上国ならではの社会構図はここでもやはり見受けられる。

１２月２日（午前）ＪＩＣＡ大使館表敬訪問

ＪＩＣＡ所長の話しの中で青年招へい事業が日本のいろいろな施設の見学だけでなくお互いの人と人との交流を深めることのできるプログラムにしたいという話があったが、今回山形における地方プログラムの一つとして小学校訪問を試みたのであるが、初めはフィリピンという国に対する偏見が強く、受け入れ側の協力をなかなか得ることが出来なかった。何度かの話し合いによりなんとか理解を得て、いざプログラムに入ってみるとこれが実に好評であり、訪問したフィリピン青年もさることながら、それ以上に受け入れ側の子供達や先生方が喜んでくれた。これは今回の計画における人と人との交流の試みの成功の一つであったと思う。

そういう過程を経て我々の社会も、国によるこだわりにとらわれるのではない、一人の人と人としての交流を持てる環境になっていくのではないだろうか。

大使館表敬訪問での話の中で、今後はよりＡＳＥＡＮ側主体のプログラムへ移行していく必要があるとの内容があったが、この事業が日本とフィリピンの色々な関わりの中での潤滑油的な役割もある以上、そう言った考えについても十分理解はできる。又、今までの招へい事業において、いかに全体的には成功しても一部問題が起こるとそこは成功した部分以上にクローズアップされ、拡大されていく危険性があるため、来年度より始まる第二次の５ケ年計画においても慣れに気を抜くことなく、と言って、あまり形式的なものにならない地方独特の暖かみのある交流に進めていくべきであろうと思う。

１２月２日（午後）現地派遣機関訪問

外務省アジア太平洋局々長とはいささか立派な肩書であり、どんな人が出てくるものかと思っていたが、家庭の主婦が似合いそうな４０才位の女性であり、どこかアキノ大統領を思わせるような雰囲気があった。且てどこぞの国の大使であったという経歴からも、かなりの権力がある事は想像できるが、話しの雰囲気も非常に親しみがこもっており、今後供より友好的な交流になるであろう事を感じた。

１２月３日（午前）同窓会役員との打合せ

外務省青年招へい事業担当者と各グループ代表者１０名（内、山形プログラム参加者１名）との懇談会の中で特に彼らの関係が大きかったのは、やはり地方プログラムにおけるホームステイであったと思う。日本の家庭に直接触れ、その家庭の人達と一緒に過した経験は彼らにとっても十分満足出来るものであった様子で、２泊３日のホームステイでは短かすぎるという意見が圧倒的であった事は受入側としても非常に嬉しい事である。我々がホームステイを計画する当ったては受入家族の苦労等も考え２泊３日が限度かと考えていたが、この事業も５年目を終え受入家族の成長もあり、もう一日ぐらいのホームステイの延長を考えてもいい時期である

かもしれない。又、ホームステイ中の言葉の問題も話題になったがそこまで整えることは難しい事であるし、又、言葉の出来ない人達が身振り手振りで意志を伝えようとするところにむしろおもしろみと、今後の発展性があるのではないかと思う。又、今後共ホストファミリーの選択にはよく配慮する必要があろう。

又、かれらの宿泊のホテルにおいてもフィリピン人であるという事に対し、ホテルの従業員から差別を受けたとか、ダンス等の練習の場所が無く各部屋のベッドをかたずけ、狭い部屋で練習をしたと言うような、こちらでは気の付かなかったような悩みもあったようで、そういう点についても今後考慮していく必要があろう。

今回の懇談会のメンバーは学生グループ、勤労青年グループが中心であり、初めて会う人達がほとんどであったが、みんな非常にきさくで紳士的であり、好人物であり、思っていた以上に青年招へい事業への参加者の選択は適切に行なわれているように思った。

１２月４日　山形グループとバギオへ

且て日本の入植者によって切り開かれたという山岳道を通ってバギオにたどりついたが、そこはビルやイミグレーションのにぎやかなマニラとは一転した山と田畑の町で、日本で言うなら山形県と言ったところであろうか。人々の顔つきも柔かく、マニラではかかせない回りの人々への警戒もここでは一休みといったところである。農地を見学すると畑はちゃんとうねが作られ、草もきれいに取られている整頓ぶりは予想以上であり、また、ジョウロで水かけをしている人達もいかにも真面目で、カメラを向けても振り向きもせず仕事を続けており、この土地の人々の特長なのか極めて素朴ではあるけれど勤勉な人柄が伺える。私はそこで初めて犬の肉なるものを食べた。民族の理解は食の理解から、などと勝手な理由をつけながら一切れを口に入れる。一口噛む毎に犬の顔など思い浮び味わうというよりは覚悟をきめて飲み込むといったところであった。明治維新後、日本で牛肉を食べはじめた時の人達もおよそこんな心境だったのであろうか。しかし、それも二切れ、三切れと食べるうちに「うまい」などと口にするようになるのであるから、我乍ら人間とは浅ましいものであると思った。

１２月５日　ベンゲット州立農業大学訪問

山形グループを見送りした後、ベンゲット州立大学校を訪問したが、ここはかつて多くのＪＯＣＶ隊員が活動し、現在も養蚕指導で一名活動中という事。その現場を見せてもらったが、野菜畑、柑橘系果樹園、桑畑共現地の人達によって良く整備されており、こちらの人々の労働力としての優秀さと、ＪＯＣＶ隊員の活動の蓄積を感じた。

ベンゲット州は高知県と姉妹都市の提携を結んだという経緯もあり、また、木村さんのＪＯＣＶとしての活動地であり多くの知人がいたという事で、ここバギオでの滞在はいたれりつくせりの歓待を受け、フィリピンの人達の思いやり、情の深さというものに触れた思いがした。

１２月７日　国際稲作研究所（ＩＲＲＩ）訪問

ここには、６３年度青年招へいグループで山形に来たメンバーが３名勤務しており、彼等が

いろいろ施設を案内してくれたが、世界中から運営資金が寄せられているだけに、その規模の大きさには驚かされる。現地スタッフ2,０００名、外国人専門家５００名という。これは、山形のトップ企業、山形銀行をはるかにしのぐスタッフ数である。この膨大な施設の中で、世界的人口増加に備えるべく米の増産研究という。日本農業とはまさに逆行するテーマに取り組んでいる訳であり、同じ農業といっても立場によってその有り方に大きな違いがあることを改めて感じる。

今後、又、IRRIからの青年招へい事業への参加メンバーがやって来ることとおもうが、彼らは日本の農業を見てどういう感想を持つのだろうか。

＊市内観光も含めた全体的な感想＊

モンテンルパの日本人墓地またアメリカ墓地を訪れ、フィリピンという国は第二次世界大戦の激戦地であった事を改めて思わされる。当然そこには現地の人達のはかりしれない犠牲というものがあったわけで、我々はその事をよく肝に銘じて今後の交流を深めていくべきであろうと思う。又、前マルコス大統領時代の悪政の象徴であるマラカニアン宮殿は、噂に違わずマルコス夫妻の贅沢な暮しぶりの片鱗を残していた。しかし、それらの権力の悪用に日本の経済援助等も大きく加担していた訳で、我々にとってもこれは決して他人ごとではないということになろう。いづれにしても日本とフィリピンとは極めて多様なかかわりの中でお互いの国が成り立っている訳で、今後それらをいかに良い方向に展開していくかという事が一層大切になっていくだろう。今回のフィリピン訪問をとおして、多くのフィリピン人と会い彼らの親切さ、人情味に触れ今迄抱いていたフィリピンに対するイメージが又ひとつベールをぬいでいくのを感じた。今後もこれらのベールを一つ一つ剝しながら、より良い理解を深めこの青年招へい事業によって、日本とフィリピンの、日本人とフィリピン人の友好関係が少しでも好転することを祈りながら今後の地方プログラムの推進にあたっていきたいと思う。

シンガポール

S.63.11.29～S.63.12.8

(財)ユースワーカー能力開発協会

1. 調査チーム派遣概要

1－1　調査チームの構成

総数は５名で、構成は次のとおりである。

「２１世紀のための友情計画」関係者４名

日野　孝子

チームリーダー

財団法人、ユースワーカー能力開発協会

岩元　厳男

財団法人、ユースワーカー能力開発協会宮崎支部

倉田　聡子

財団法人、国際協力サービス・センター

柴田　満美

独協大学

「シンガポール都市勤労青年との合宿セミナー」参加者１名

前田　孝博

法務省東京入国管理局

1－2　調査日程

期間は１０日間であったが、往復の旅行日を除いた実質８日間が調査にあてられた。

日程は次のとおりである。

日程表を挿入

1－3　主要面談者

(i)　訪問先

国際協力事業団シンガポール事務所所長　石崎　光夫　氏

帰国青年同窓会（SAJAFA２１）　会長　MR. CHRISTOPHER CHAN

(ii)　表敬先

シンガポール外務省ＡＳＥＡＮ局　局長　MR. K. KESAVAPNNY

日本大使館　村山　比佐斗　公使

人民協会事務局　局長　MR. LEE CHIONG GIAM

(iii)　受議先

住宅開発庁　MR. TAN HENG HUAY　MR. TAY YEW NGUAN

教育省　MR. JOE

社会開発省　MR. JEREMY TAY

国家生産性庁　MR. EDDIE LIM KENG SIANC　MR. JEFFERY

大蔵省社会開発局　DR. EILEEN AW

2. 調査の要約

(1) 訪問

◎ ＪＩＣＡシンガポール事務所

(i) ＪＩＣＡとシンガポールとの協力の意義、及びその重要性について、技術協力、災害援助協力等の具体例とともに説明をうける。

(ii) 今回のシンガポール訪問で相互理解を深めて、今後の交流に役立てて欲しいとの激励をうける。

◎ 帰国青年同窓会（ＳＡＪＡＦＡ — Singapore Asean Japan Friendship Association ）

シンガポールでの日程の進め方、同窓会の目的、組織、活動、運営等につき説明をうけ、そのあと日本からのグループの受け入れ方法等の相互交流の実施方法につき意見交換を行った。

(2) 表敬

◎ シンガポール外務省ＡＳＥＡＮ局

(i) シンガポールと日本との関係を、経済面、人的交流面を通して説明をうける。

(ii) この友情計画については、両国間の相互理解にとって重要なものであり、５年間延長されたことを歓迎している。

◎ 日本大使館

(i) 日本とシンガポールの関係における大使館の業務、役割りの説明をうける。

(ii) 友情計画は、民間レベル、市民レベルでの交流を深めるために意義深いものであり、今回の訪問で大いに交流を深めてほしい。

◎ 人民協会事務局

フィルムによる人民協会の歴史、組織、活動の紹介のあと、局長の訪日体験を通しての日本人観、及び日本のシンガポールに与える影響等について歓談する。

(3) セミナー、及び見学

◎ 住宅開発庁 —「シンガポールの住宅事情」講義

「シンガポールの住宅政策の中心をなしているＨＤＢフラットとは何か。その需要と供給について。」 講義のあと質疑応答　　見学　ＨＤＢフラット

アンモキオ西部地区協議会

◎ 教育省 —「シンガポールの教育事情」講義

「シンガポールが目ざしている教育とは何か。そのしくみと方向性について。」 講義のあと質疑応答　　見学　ニーアン工芸学院

◎ 社会開発省　「シンガポールの多民族社会と住民委員会の役割」 講義

「多民族国家シンガポールの抱える問題とは。その対策と調和について。」 講義のあ

と質疑応答　見学　チョンパン住民委員会

◎　国家生産性庁　「ＱＣＣ（品質管理サークル）」　講義

「天然資源、労働力人口が少ないシンガポールが、国際社会で生き残るには。その活路と将来性について。」　講義のあと質疑応答　　見学　資源開発公社

◎　大蔵省社会開発局――「結婚問題と社会開発局の役割」　講義

「女性、学歴、出産率、シンガポールが直面する重要課題とは。その現実と国家の役割について。」　講義のあと質疑応答

◎　その他の見学先

コミュニティーセンター、老人ホーム、セントサ島、サイエンスセンター

(4)　ホームステイ

ホームステイは、金、土、日曜日の２泊３日で実施された。日本からの初めての派遣団ということで、同窓会役員、または役員知人宅にお世話になった。表面的ではあっても、シンガポールの文化、習慣等を体験でき、非常に有意義であった。

(5)　評価会

帰国前夜、同窓会の役員、ＪＩＣＡシンガポール石崎所長を交え、今回の訪問を通しての感想、プログラムの内容、ホームステイ等の総合評価、及び今後の交流方法について意見交換を行った。

3.　現地活動報告

３－１　表敬、訪問先における意見交換内容

◎　ＪＩＣＡシンガポール事務所　所長　石　崎　　光　夫　氏

ＪＩＣＡがシンガポールに対して行っている技術協力は、シンガポール国家の基本政策である知識集約型産業育成において必要とされる先端技術、生産性向上のための専門家養成、日本的経営方法を学ぶための人的交流のみならず、都市環境問題、防災教育、安全運転教育、中小企業振興等の面にまで及んでいる。またシンガポール航空の世界的路線網とシンガポール人の迅速な行動力により、外国での災害発生に対する迅速な対応、及び緊急援助のための備蓄基地としてのシンガポール、すなわち国際協力、特にアジア・太平洋地域においてシンガポールは非常に重要かつ絶好の拠点である。例えば、今回起こったタイ南部の大洪水に対し、ＪＩＣＡシンガポールからの緊急援助は、シンガポール航空の協力により他のどの国よりも早く行うことができた。

このように国際協力の面でも日本とシンガポールは重要な関係になっている。これからも協力関係を維持していくためには信頼関係が不可欠である。信頼関係の基礎は相互理解である。そのためにも今回の訪問で大いに交流を深めて欲しい。

◎　シンガポール外務省　ＡＳＥＡＮ局　局長　MR. K. KESAVAPNNY　他４名

シンガポールと日本との関係については、経済面ではシンガポールが自由貿易国ということもあり、多数の日本企業が活動しており親密化を増している。シンガポールとしては、日本との関係を将来的にも存続し友好を深めていきたい。そのためには、経済面ばかりでなく人的交流も不可欠である。その意味で、この「２１世紀のための友情計画」がさらに５年間延長されたことは、意義深いものであり大いに歓迎している。

◎　日本大使館　村　山　公　使

日本とシンガポールは、経済面においては非常に重要な相手国になっている。

日本はシンガポールに対し、技術的、経済的な協力を行っているが、それはあくまでも国家間的、企業間的交流であり、民間レベルでの交流はそれほど多くはない。日本とシンガポールが、ほんとうの意味での相互理解を深めていくためには、人的交流、それも草の根的な交流が必要である。この「２１世紀のための友情計画」がさらに５年間延長されたということは、この計画に対する両国間の相互理解への期待度の高さの現われであり、相互交流のもつ意義の認識でもある。そのためにも、シンガポール滞在中に接する青年たちの生の声を今後の交流に生かしてもらいたい。

◎人民協会事務局　局長　MR. LEE CHIONG GIAM　他４名

シンガポールが日本に対して学ぶことは、まだまだたくさんある。物質的な面でもそうだが、特に精神的な面においてそうである。例えば、そうじ１つをとっても、日本人はやり残しはないか、きれいになったか、というようにすみずみまで気を使かっている。つまり日本人は自分の仕事に対して責任感を持ち、また常に問題意識を持ちながら行っている。シンガポールの人たちにも、そういった日本人の心構えといったものを学んでもらいたい。

３－２　帰国青年同窓会等の活動状況

帰国青年同志のつながりを保つために、現地では、SAJAFA(Singapore ASEAN Japan Friendship Association)が結成されている。現在２７名の役員が、下記の５つの委員会に分かれ、Newsletter の発行や、各種行事の企画などを行っている。

International Committee

Publication Committee

Social Committee

Membership Committee

Publicity Committee

目下、１２月２５日にマンダリンホテルで開催される「Japanese Night」の準備に忙しいということであった。この日のパーティには服装や持ち物の中に、必ず日本風のものを含めなければならないらしい。

同窓会の会員になるには、年間２０シンガポールドル（約１３００円）の会費を払う。メ

ンバーには、特定の施設の入場料が割引になるという特典が与えられる。入会は義務付けられてはいないが、近年、かなりの数の青年が加入しているようである。

現在、日本から合宿参加青年、ホストファミリー、地方自治体の青年層（友情計画をきっかけとして）がシンガポールを訪問する際は、同窓会の役員、会員が役割分担をしてガイドしている。案内すること自体には、全く問題無いが、訪問前にＳＡＪＡＦＡに直接連絡してほしいということであった。（情報の混乱を避けるため連絡系統を整えたいということである）

苦労している点は、友情計画の帰国青年も５年間で７５０名となったが、年間会費制をとっているので、４、５年前に来日した青年をどうＳＡＪＡＦＡにつなぎ止めておくかということである。そのため、ＳＡＪＡＦＡはメンバーになった際に入場料等の割引を受けられる特定の施設を増やすように、努力しているようである。

３－３　セミナー、交流会実施状況

シンガポールの実情を知るための一環として、次の５省庁を訪問し、受講及び討議を行った。

各講義は、いずれも最初にスライド、又はフィルムによる説明がなされたあと、通訳を介し質疑応答に入るという形で行われた。

(i)　「シンガポールの住宅事情」

住宅開発庁（HDB－Housing and Development Board）

出席者　MR. TAN HENG HUAY　　MR. TAY YEW NGUAN

(イ)　講義内容

ＨＤＢによる住宅政策は、公営高層マンション（ＨＤＢフラットという）の大住宅団地を都心部のみならず郊外にも建設し、分譲するという形で行われている。現在、全人口（約２６０万人）の約８６％（２２０万人）がこのフラットに住み、このうち70～７５％（１５０～１７０万人）が持家になっており、最終的にはフラット入居人口の９０％（２００万人）を持家とすることを目指している。

フラットは、３ルーム型が最も多く価格も１４０万円くらいから購入できる。購入にあたっては、中央積み立て基金（CPF－Central Provident Fund．これは労働者の退職後のために、雇用主が１２％、労働者が２４％の割合で給料から天引きの形で積み立てるもの）を頭金に充てることができるが、先着順の申込み制であり、入居できるまで約３年ほどかかる。フラットの売買については、投資目的による値上がりを防ぐために、市場価格により１回のみとし、売買相手もフラット入居予定者リスト登載者に限られる。

外国人の賃貸、購入は原則として認められていない。

(ロ)　質疑応答の主な内容

Ｑ　フラットには民族の構成比率を考慮して入居させているのか。例えば、１つの棟

には中国系が何人、マレー系が何人というように。（シンガポールの人口構成比率は、中国系７６％、マレー系１５％、インド系６％、その他３％）

Ａ　申込み順なので民族の比率は考えない。

Ｑ　そうすると、例えば、ある棟では住民のほとんどが中国系で占められ、同族意識や宗教上の関係から他の民族を排斥したりするようなことは起きないのか。

Ａ　シンガポールは多民族国家であり、長年そういう生活に慣れているので、そういう問題は起こらない。１つの棟の民族構成比率は、自然的に人口のそれと同じようになっている。また、町内会のような組織があり、民族間の調整に役立っている。

Ｑ　入居者に対して何か考慮している点はあるか。

Ａ　例えば、両親との同居を望む場合は、優先的に大きなフラットに入居させたり、隣りどうしのフラット、あるいは同じ棟に入居してもらっている。

Ｑ　身体障害者に対しては何か配慮しているのか。

Ａ　エレベーター（各階には止まらない）の止まる階のフラットに入居してもらったり、駐車場の近くのフラットに入居してもらったりしている。

Ｑ　フラットでは猫を何匹か見かけたが、動物等を飼ってもよいのか。

Ａ　犬、猫、小鳥等の小さな動物なら２匹まで飼ってよい。

Ｑ　近隣からの苦情は出ないのか。苦情があった場合の対応方法はどうするのか。

Ａ　苦情はほとんど出ないが、出たときはＨＤＢから当人へ直接指導する。しかし、マレー系住人は宗教上、犬に触れてはいけないので、将来この件に関しては検討の余地がある。

Ｑ　ＨＤＢに限らず、シンガポールの政策的な面で何か特徴的な点はあるか。

Ａ　政府が民間のことを非常によく考えていることである。これにより国民が政府の広報を信用し、信頼してくれている。シンガポールが豊かになったのは喜ばしいことだが、物質的豊かさになれすぎて物質的な面に価値判断を置くようになりつつある。とくに若者の間で。そこで、現在、シンガポール独自の文化（例えば、シンガポールダンスなど）づくりに力を入れている。

(ii)　「シンガポールの教育事情」

教育省（ＭＥ　　Ministry of Education）

出席者　ＭＲ．ＪＯＥ　　他２名

(イ)　講義内容

シンガポールの教育制度の特徴は、義務教育ではないことである。しかし国民の教育に対する関心は高く、ほとんどの者が小学校へ入学する。システムは少々複雑で、小学校の３年終了時の試験で進学課程と就職課程に分かれ、進学課程へ進んだ者は、その後各種の試験制度により、大学、短大、職業訓練学校、専門学院等のコースへ進む。

大学は国立のシンガポール大学１校のみで、他に４つ（技術１、工芸２、教育１）の専門学院がある。

小学校３年までは語学教育として共通語の英語を、同時に民族語の２言語教育をうけ、その後進学課程へ進んだ者は２言語教育、就職課程へ進んだ者は１言語教育をうける。

優秀な生徒は、その能力をさらに伸ばせるように能力に応じた特別教育をうけることができる。

(ロ) 質疑応答の主な内容

Q　教育方法には、知識習得か個性重視かの２つに分かれると思うが、シンガポールではどちらに重点を置いているのか。

A　両方である。そのためにいろいろな科目を用意して柔軟性をもたせ、個性に応じてカリキュラムが多く組めるようになっている。

Q　多民族社会であるので、社会生活をするうえでのルール、つまり道徳に関する教育が重要だと思うが、その指導方法は。

A　学校と家庭との間に〝学校だより〟のようなものを配布したり、通知表を渡すときに親に学校へ来てもらって、できるだけ子供を含めた話し合いをもつようにしている。もちろん、政府による社会環境の見直しも行っている。

Q　将来的な教育の方針はどうなっているのか。

A　これからも人的資源としての教育に力を入れていく。また教育省に属さない学校設立が認められているので、諸外国へ視察団を派遣して、そのよいところを取り入れ、独立学校のカリキュラムの充実を計っていく。

(iii)「シンガポールの多民族社会と住民委員会の役割り」

社会開発省（ＭＣＤ　Ministry of Community Development）

出席者　ＭＲ．ＪＥＲＥＭＹ　ＴＡＹ　他２名

(イ) 講義内容

現在、全人口の８６％がＨＤＢフラットに入居しているが、社会開発省は、各民族の民族性を考えたり、少数民族への配慮を行って各民族間の調整を計り、人権を擁護することを目的としている。

人権擁護の概念は、１９８５年にスウェーデンから取り入れた「Social defence」の考えを、シンガポールに合うように形を変えたものであり、次の５つに分類される。

1. 民族間の調和を計る。
2. 互いの宗教に寛容になる。
3. 助け合う。
4. シンガポールの共通の遺産（勤勉な国民、平等な社会）を持っていることを認識させる。

5. 1つの運命共同体であることを認識させる。

各地には、363の住民委員会（RC — Residents' Committee）があり、民族間の相互理解のための活動を行っている。

各民族間の慣習上の問題は、各民族間の右派的活動に拍車をかけやすく、紛争になりかねないので、事あるごとに確認していく必要がある。

(ロ) 質疑応答の主な内容

Q 住民委員会の活動の内容は、

A 行事を行う場合、障害者も含めた全員が参加できるような内容を考えたり、転居してきた住民に対し、地域住民との交流がうまくいくようにメンバーへの入会を勧めたり、活動資金を得るために、バザーや廃品回収を行っている。

Q 各民族間の慣習上の問題の具体例は。

A 中国系の住民は、線香をよく燃やすので煙が周囲にたち込め、他の民族がいやがる場合がある。

Q そういった場合の解決策は。

A 「Social defence」の概念の中にあるように、互いの宗教に寛容になると同時に、相手のことも考えるように指導する。

Q 各民族の民族性を考えるとは、例えばどういうことか。

A レクリエーションでダンスをするときも、すべての民族がダンスを好きだとは限らないので、内容をよく考えるようにする。

Q 各民族に圧力団体のようなものはあるか。

A そういうものはない。各民族間の話し合いを密にして解決を計っており、問題が起こる前に解決することに努力をしている。

(Ⅳ) 「QCC」

国家生産性庁（NPB National Productivity Board）

出席者 MR. EDDIE LIM KENG SIANC 他10名

(イ) 講義内容

シンガポールは天然資源がなく、人的資源としての労働人口も他の国々と比較して少ないため、生産性を高めることが重要課題となっている。国家の生産性を高めるためには、労働者の仕事に対する態度を向上させる必要がある。そこで生産性に関する委員会が作られ、生産性に関する施策を作るために国家生産性評議会が置かれ、国家生産性庁がその施策を実行する。

NPBは1972年に発足し、81年に拡大した。82年に評議会の活動が始まる。アメリカ、韓国、台湾、日本に視察団を派遣して、QCCに対する各国の状況を分析し、日本の生産性の向上が労働者の生産性に対する考え方の高さにあるところから、日

本をモデルとする。

ＮＰＢのＱＣＣに対する援助の対象は、従業員１００人以下の中小企業であり、大企業は独自のＱＣＣを持っているので必要ない。援助の内容は、人材と設備のスムースな機能のためのシステム開発、従業員のトレーニング等であり、また指標によって生産性を測定したり、優秀な企業の表彰、さらにマスコミとの関係を密にして広報活動を行っている。

現在、ＱＣＣ参加者は全労働者の４％（５６０００人）、登録会社は１８３社（政府機関を含む）７５００サークルである。

(ロ) 質疑応答の主な内容

Ｑ　シンガポールは多民族国家であるので、日本よりもアメリカの方が参考になる点が多いのではないか。

Ａ　日本は体系化したＱＣＣに対するシステムを持っているが、アメリカは労使関係が主であり、日本のようなシステムは持っていない。それと日本人の精神というものを学びたい。

Ｑ　各民族間で仕事に対する考え方の違いはないのか。

Ａ　考え方にそれほどの違いはないが、ことばの問題はある。

Ｑ　指標によって生産性を測定するとはどういうことか。

Ａ　シンガポールの経済成長率が上がったら、国の生産性が上がったと評価する。

Ｑ　ＱＣＣがうまく作用するためには、どんな条件が必要か。

Ａ　会社への忠誠心である。しかしシンガポールの場合は、従業員よりも経営者側のＱＣＣに対する理解を高めることが必要である。というのは、シンガポールでは終身雇用制ではないので、経営者側は転職することが多い。

Ｑ　ＱＣＣの活動は、将来マンネリ化の状態が来ると思うが、そのときの打開策は考えてあるのか。

Ａ　各国へ視察団を派遣して、それぞれの打開策を勉強している。

Ｑ　労働組合の反対はないのか。

Ａ　反対はない。というのは、企業と労働者とが一体となって生産性を高めることに努力しており、生産性が高まれば企業の収益が上がり、その結果労働者の生活も豊かになる。また、QCC の活動資金は会社が全額負担である。

Ｑ　シンガポールと日本とのＱＣＣに何か大きな違いはあるか。

Ａ　シンガポールでは、政府機関のＱＣＣの方が民間よりもさかんである。

(V) 「結婚問題と社会開発局の役割」

大蔵省社会開発局（ＳＤＵ ― Social Development Unit）

出席者　ＤＲ．ＥＩＬＥＥＮ　ＡＷ　他５名

(イ) 講義内容

シンガポールでは、今日高学歴女性の独身者が増加し、晩婚にともない出産率が低下している。原因としては、女性の高学歴化（シンガポール大学の半数は女性）により、男女間に学歴の差が生じ、男性の徴兵制（１８才～２０才）により同年代の男女間に婚期のずれが生じている。また女性の社会進出が進んでいるため、大学卒業後に社会に入ると、男性は徴兵制の関係で昇進が女性より遅れるため、男性が同年代の女性を敬遠する傾向がある。以前は人口増加を懸念して「子供は２人まで」という人口抑制策をとってきたが、現在は高学歴夫婦の多産を奨励している。

ＳＤＵは、国家的政策として、パーティー、テニス、ゴルフ等のスポーツ、小旅行、ピクニック等の各種のイベントを催して知り合いの場を設け、高学歴独身者の結婚の手助けを行っている。また日本に視察団を派遣して、民間の結婚紹介業のシステムも研究している。

(ロ) 質疑応答の主な内容

Ｑ　なぜ結婚問題を大蔵省で扱うのか。

Ａ　たまたま、大蔵省の事務次官が最初に日本へ民間の結婚紹介業の視察に行ったため、大蔵省の中にＳＤＵが組織された。

Ｑ　登録するのに基準はあるのか。

Ａ　男性の場合は、高卒か大卒であることが条件である。

Ｑ　では、その条件にあてはまらない男性はどうなるのか。

Ａ　中卒以下の人の場合には、より上の資格をとるように政府が指導する。現実問題として、高学歴女性の独身者が増加しているので、手助けの対象としては同等の学歴を持つ男性が中心となる。また女性の方もそれを望む者が多い。

Ｑ　離婚率についてはどうか。

Ａ　離婚については調査していない。

３－４　ホームステイ実施状況

日程の関係上、金、土、日曜日の３日間（２泊３日）を各人がこれまでの交流セミナー参加者、及び関係者の家庭で過ごした。

各メンバーのホストファミリーは、次のとおりである。

日野　孝子　MS. TERI YUNG

岩元　厳男　MR. WOO SUI KEE（'85 青指）

前田　孝博　MR. CHOW YEW CHEONG（'85 青指）

倉田　聡子　MR. CHRISTOPHER CHAN（同窓会会長　'86 青指）

柴田　満美　MS. TINA WONG（'84 勤青）

＜ホームステイについての感想＞

日野孝子

私のホストファミリーは、Ms. Teri Yung. 友情計画同窓会の前会長のMr. Luiの友人で、２４才の歯科医である。家族５人（父、母、兄、弟、本人）でクイーンズタウンにある。ＨＤＢ（住宅開発局）のフラットに住んでいる。彼女のお宅に、１２月２日から４日の２泊、お世話になった。

彼女の住んでいるアパートは、ベッドルームが２つに、居間、キッチン、バス、シャワーがある。そこに家族５人で暮らしているので、決して広々としているとは言えない。日本のアパートと違う点といえば、お風呂にバスタブがないことと、玄関が防犯のために、二重扉になっていることである。内側の扉はごく普通だが、外側のものが、鉄格子になり大きな南京錠がかかっているので、戸が閉っている時は、なかなか人を近づけない雰囲気がある。

ホームステイ中は、グループ共通のバーベキューパーティーや、タウンカウンシル機関誌用のインタビューの他は何をするでもなく、近所のスーパーマーケットで買い物をしたり、彼女の勤めている歯科医院を訪れたり、折り紙を教えたりと、たいへんゆっくりと過ごした。

Teriは現在、日本語のレッスンを週に２回とっているので、多少日本語を話す。それだけでなく、和紙人形に興味を持っていて、紀ノ国屋書店で人形の作り方の出ている本、和紙をたくさん買込み、試しているそうである。せっかくだから作ってみてほしいと言われたが、残念ながら私にも出来ないので、かわりに折り鶴を教えた。日本にいれば「やらない、出来ない」で済ませられても、海外では、日本人なら出来て当り前と考えられてしまう。そこで、Teriのように熱心な人に会うと、何も出来ない自分が恥しく感じられた。

驚いたことは、彼女は家族と一緒に生活しているにも関らず、朝、昼、夜の食事をほとんど外食で済ませていることである。彼女の説明によると、「家族皆、働きに出る時間も違うし、帰る時間も違う。それに、外食といっても、ホッカーセンターという屋台で食べればとても安く、またインド料理、マレー料理、中国料理といろいろな種類の物が食べられる。一人で食べていても、別にさみしくない」ということであった。これは、彼女が２４才で仕事を持っているためかもしれないが、まだ小さい子供たちが、どのように両親と食事を取っているのか、とても興味を持った。

もう一点は、彼女がお兄さんと部屋を共用していることである。シンガポールでは、国内の住宅の９０％を占める国の公団住宅を購入出来る条件として、結婚していることをあげている。収入が高ければ、残り１０％のプライベート住宅を購入出来るが、ほとんどの場合、Teriのように、窮屈をがまんし合う状況となる。彼女は、「生まれてからずっとなので慣れてしまった」と言っていたが、ご両親は、早く結婚しろとうるさいそうだ。

今回の２泊３日のホームステイでは、前後の日程がかなりつまっていたので、生活体験というより、休養になってしまった。出来れば、もう一日長く宿泊し、Teri のご家族と一緒に過ごす時間が欲しかった。

彼女の家のまわりには、スーパーマーケット、市場、ホッカーセンター（屋台）、映画館等、生活に必要な施設が整っている。国が狭いので、国民が買い物のためにあちこちと移動しなくてよいためにと進められている政策の一つである。東京の住宅事情と比較してみると、日本がシンガポールに学ばねばならないことも多い気がした。

前田孝博

ＢＬＫ５７０　ANG MO KIO AVENUE　これが今回お世話になったホスト宅である。私のホストは、地域活動委員会のメンバーである２５才の独身青年、MR. CHOW YEW CHEONGで、ＨＤＢのフラットに家族とともに住む。フラットは寝室２、リビング１、台所１、それにシャワールームの平均的間取りである。

食事はホッカーセンターと呼ばれる屋台でとる。屋台といっても日本で言う屋台とは違い、各種中国料理、マレー、インド料理からフルーツジュース等の店まで、シンガポールの味が楽しめるファーストフード店が集まったようなところである。ホッカーセンターは、商店街や大規模なＨＤＢフラットの一角など各所にあり、シンガポール人の多くが利用している。値段も安く、種類も豊富なので、若い女性が料理をしなくなったとホストの彼は言っていたが、ホッカーセンターがあるから女性が料理をしなくなったのか、料理をしなくなったからホッカーセンターが賑わうのか、興味のあるところではある。独身女性がふえている原因の１つに、意外とこのホッカーセンターがあるのでは。

夜はホストの案内で、コミュニティセンターの活動や、彼が委員長を務める委員会のミーティングを見学したり、他のホスト宅でのパーティなどと、大いに交流を深めた。

倉田聡子

私のホストファミリーは、ＳＡＪＡＦＡ会長のクリストファー・チャン。家族はスーザン夫人、長女ヴァレリー（１２才）、長男ティビッド（８才）の４人家族である。２泊３日のホームステイでは、私は彼ら以外にも実に多くの人に会ったし、まさかホームステイでマレーシアに行くとは思わなかった。クタクタにはなったが、貴重な体験をした３日間であったと思う。以下に簡単ではあるがどんなステイだったかを記したい。

第１日目の夜、一家と対面した後、車で彼らの親戚宅に寄り、その後すぐシーフード・レストランへ夕食を食べに行く。豪快なカニ料理を楽しんだ後、チャン家の友人一家を空港近くのロッジに訪ねた。そこはインド系の一家であったが、中国系のチャン一家、日本人の私、といても一向に民族の違いを感じさせないのは、やはりシンガポールならではであろうか。

そうこうしてチャン家へ１１時頃到着した。家の中は日本と違ってごちゃごちゃした家財道具などがなく、中国風の美しいインテリアでとても気に入ってしまった。それから夫妻と日・シの住宅談議になったが、東京の地価高騰は彼らの想像を絶したようだ。

その夜はヴァレリーの部屋で寝た。私が翌朝「クーラーを切って寝た」と話したら、皆驚いていたが。

２日目は、午前中マンモキオ西地区住民協議会で、他の日本人メンバーと共に広報誌のインタビューを受ける。

午後は近くの親戚宅へ行った後、私はクリストファーについて住民協議会の役員会議を見学に行く。彼は役員の１人で、他地区からも３名代表が来て、ある企業からの「広告付き公共標識」の提案について検討したのだった。見学時の説明からも察せられたが、日本の自治会よりもっと強力な活動をしている様子が理解できた。

会議が終った後、さきほどの親戚と一家で、マレーシアに向う。スーザンのお兄さんの５０才の誕生日パーティーに行くのである。そこはジョホール西部のポンティヤンという小さな街で、シンガポールとは全く異るのどかさであった。

スーザンの兄宅では、親類・友人・近所の人達５０人程が集まっていた。若いいとこ達が英語で通訳してくれたが、飛びかう広東語がわからなくても、すぐ輪に入れてくれる。まさに飲めや歌えの盛大なお祝いで、私も日本の歌を披露して拍手をもらった。みな陽気で人なつっこく、大変楽しい一夜であった。

その日は別の親戚宅に泊まったが、翌朝７時からいとこたち（少女たち）が私を街の案内に連れ出してくれた。海べり、消防署、市場、果てはレストランの厨房まで……。かわいい彼女たちとはすぐ仲良くなれ、熱心なガイドを私も大いに楽しんだ。が、来シ以来の疲労が出始めており、その後シンガポール動物園を訪れてチャン家へ帰った時には、頭痛と吐き気で完全に体調を崩していた。夕食の申し出も断り、すぐホテルに送ってもらって休んだが、何ともさえないホームステイの最後にもかかわらず、夫妻は私のことを気づかってくれたので心強かった。

このホームステイを通し、これだけのいろんな体験をできたこと、また日本に対する戦争の恨みにもかかわらず、人々が私を暖かく迎えて下さったことは忘れ難い思い出となるだろう。また、私にとっては２泊３日の滞在は、今後の友情を育む糸口である。国同士の友情も個人間の友情が基礎となる。施設訪問だけでなく、やはりホームステイが交流計画には不可欠だと思う。また、できればホームステイ前を含めて、日程と内容にゆとりをもたせられれば、より良いものになるだろう。

柴　田　満　美

私のホームステイ先は中国系の独身女性のプライベートハウス（コンドミニアム）で、自分１人の部屋を使わせてもらいました。

私は、精神的に疲れていたため、あまり出歩かず、シンガポールのホームドラマを見たり、バーベキューパーティーの屋内版をやったりして、２泊３日という短い期間でも少しはシンガポールの生活を体験することができたので、とてもよかったです。

夜などは毎晩時間があったので、２人で落ちついてお話をすることができ、これはなによりの収穫だったと思います。

話が前にもどりますが、ホームドラマについてで、これは夫が妻の仕事を認めず、妻に家にいろというもので、今のシンガポールで問題になっていることを取り上げていて、おもしろく見させていただきました。続きがどのようになったのか、というのが少し心残りでしたけど。

岩　元　厳　男

見事なヒゲを蓄えたウーさんは、スポーツマンで、空手や水泳、ダイビング等の指導者でもある。余りにもスポーツに熱中し過ぎ、結婚するのを忘れていたという。４０ン才の彼は、電工会社の経営者でもある。大変な社交家で、何時でもジョークをとばし、皆を笑いの渦に巻き込んでいる。

ホームステイが開始された時の最初の会話はこうであった。

「ヤァ、Ｍｒ．イワモト元気か？」

「私は大丈夫だが寝不足だ。毎日５時間位しか眠っていない」

「オケラー（ＯＫのこと）その位問題ない」

「さて、我々のプログラムだが、明朝５時に起床し、ジョギングで魚市場を見学し、コミュニティクラブで水泳、そして食事の後ウインドサーフィンを楽しむ予定だが、いかがかな？」

これは大変なことになったと思い、「ウーさん、ところで市場まで何キロメーター位あるんだ？」と尋ねると、「たいしたことは無い。だいたい１０㎞位だ」との事、次第に心配になる。近くで聞いている他のメンバーはニコニコしながら私達の会話の成行きを楽しんでいる。「ウーさん、私はスポーツシューズもパンツも持って来ていないのだから、早朝のジョギングだけはやめた方がいいよ。」と断わろうとするが、「オケラー、オケラー、自分のを貸してやるから問題ない」と言う。

こんな会話でホームステイプログラムが始まり、彼の自宅に着いたのが夜の９時過ぎであった。早速、彼の姉さんが前日から用意してくれた中国風の手料理に舌つづみを打ち、タイガービールでお互いの友情に乾杯した。

彼は、２１世紀のための友情計画の青年指導者グループで日本を訪れており、日本での印象などいろいろ話してくれた。多くの楽しい想い出を記したアルバムには、数多くの写真の他、山手線のキップをはじめ、様々なチケットが日程に従って完璧に整理されており、彼の意欲的な行動の様子が伺われた。話しに夢中になり、床についたのが１２時過ぎである。

翌朝、目が覚めたのは７時過ぎだった。朝食もとらず、日本製のジープで魚市場へ直行した。

しかし、到着した時は既に魚一匹いなく、２人で大笑いした。シンガポールの魚も早い。

市場見学に引続き、火力発電所や飲料水の貯水池、そして海洋レジャー施設を訪れ、彼から詳しい説明を受けた。シンガポールでは、自然を活用し、調和のとれた都市計画がなされている様である。

近代都市に住むウーさんのものの考え方に関心を持ったことがひとつある。それは、タバコについてである。彼は毎日５本のタバコを、午前１０時の休憩、昼食後、午後３時の休憩、夕食後、夜食後にそれぞれ分けて吸うのである。彼は、タバコを味わうために吸うのではなく、リラックスするための物であると言う。実にはっきりとした目的意識を持っていることに、つくづく感心させられた。

ホームステイは、わずか２日間という短い期間ではあったが、寝食を共にしながら親交を深め、お互いの立場を理解するのに大変有意義なプログラムであったと思う。今でも、ウーさんの笑顔が目に浮んで来ます。

ウーさん、楽しい想い出を有難う。

4. 訪問国における青少年団体の活動状況

シンガポールの代表的な青少年団体として人民協会（People's Association ）を訪問した。人民協会は、１９６０年７月に、反国家勢力に対する政治的、軍事的安定のために設立された。現在、２０００名の職員を有し、全国１１４のコミュニティーセンターで、レクレーション、スポーツ、コンピューター、料理、語学などの講座を開催している。また、共働きの両親のために、センター内に託児所も設けている（Day Care Center）。活動内容から考えると、日本においては、市町村等の行政が行っている活動と、ほとんど同じであるだろう。事実、人民協会は社会開発省の傘下にある。

今回、ゲランウエストコミュニティセンター及び、ケブンバルコミュニティセンターを実際に訪問した。

ゲランウエストコミュニティーセンターでは、デイケアセンターを見学した。１２月は、丁度学校の休暇になっているため、通常よりは少なめだそうだが、３０名程の子供たちが在室し、習った歌を披露してくれた。壁には文字や数を覚えるための絵がはられていて、日本の保育園とほとんど変わらない。違う点といえば、掲示物が英語で、先生がインド系の女性、天井からは「華人、華語」という中国語を話そうというキャンペーンの札が下げられていることだ。

ここでは、両親の勤務時間に応じ、朝から夕方まで子供たちを預かっている。

一方、ケブンバルコミュニティーセンターでは、スポーツ活動等を見学した。Modern Community Centreと言われるだけあって、たいへん施設が充実していた。バレーボール、スカッシュ、バドミントン、フィットネスジム、エアロビクススタジオ等の体育設備のみでなく、写真室（暗室）、調理室、図書閲覧室、音楽室等の文化設備も整っていた。

一番人気のある講座は、社交ダンスだということで、曜日ごとにレベルを変え、いくつものコースが設置されているそうである。

コミュニティーセンターの存在自体が、青年のためだけでなく、その地域に住む人々全てが豊かに暮らすことが出来るように考えられており、その意味でも人民協会は、シンガポール国内において、かなりの影響を持っていると思う。

大蔵省の元に、社会開発局という部局がありいろいろな行事を計画し、高学歴の独身者を少なくしようと努力しているが、人民協会の内部にも、Social Development Section（SDS）があり、若者同士の出会いの場を提供しているということである。

5. 青年招へい事業に対する相手国側の評価

シンガポール外務省、人民協会、同窓会、ともに友情計画を高く評価しており、さらに5年間延長されたことを非常に歓迎している。

教育省より

(1) 評価

- 友情計画が、アセアン諸国との交流を深めることに役立っている。
- 毎年、プログラムがよくなってきている。
- 学生、教員といっても、いろいろな分野があるので、1カ月間日本に滞在しても観光になってしまっている場合もある。

(2) 要望

- 日本から、できるだけ多くのことを学べるようなプログラムを作ってもらいたい。
- グループ分けを細分化する。例えば、理系、文系のように。そして細分化されるなら、学生グループに教員が加わっても問題ない。

帰国青年より

日本の文化、習慣等を知る機会として、ホームステイを高く評価しており、期間の延長、ホストファミリーの家族構成等を事前に知らせてほしいとの要望があった。

6. 調査チーム参加者の感想

日野孝子

シンガポールのチャンギ国際空港に到着し、夜中の2時近くにも拘らず、数カ月前に来日した青年や、もう何年も前に来日した青年が入り混り出迎えて下さった時には、ただただ感激し、このプログラムが、アフターケアで本当に良かったと思った。空港への出迎えに限らず、訪問中毎日3～4名の方々が有給休暇をとってプログラムに同行して下さり、全く不自由を感じることはなく、無事10日間の日程を過ごすことが出来た。

今までの実務担当者としてシンガポール青年の受入れに携わっていたので、シンガポール事

情についてはおおまかに聞いたことがあったが、まさに「百聞は一見に如かず」という言葉通り、実際に省庁を訪問してブリーフィングを受けてみると、新たに感じることがたいへん多かった。特に、国と国民の関係については考えさせられることが多かった。

シンガポールは国土が狭い。東京２３区程の広さに約２２０万の人々が生活している。多民族国家で、中国系、マレー系、インド系とその他の人々が共に暮らしている。

１９８２年の調査でシンガポール政府は偶然、高学歴の女性で独身の人が多いということを発見した。結婚年齢も高学歴を受けるために遅くなっている。このままでは子供の数が減り、若者の数が減り、いずれは労働人口も減ってしまうと考えた政府は、大蔵省の元に社会開発局（ＳＤＵ）という結婚相談所を設け、人民協会という青少年団体では、若い人々の出会いの場を作るようになった。又、国家生産性庁では、将来労働人口が減少した際にも国際的に生き残ることが出来るように生産性運動を各国から学んでいる。

天然資源もなく、人材こそが国の宝というシンガポール。想像していた以上に、国の人材育成に対する意気込みが感じられた。

しかしながら、立場を変え、私がもしシンガポール人で、国から「早く結婚して下さい。子供はなるべく多く」などと言われたら、どのように感じるであろうか。シンガポールを特殊な例と決めつけてしまうのでなく、私自身の生活でも考えてみたいことである。

見学の中では、老人ホームがとても印象的であった。まず所長が老人ホーム経営の難しさ、問題点などを中心にブリーフィング。その後、お年寄りの生活する部屋、食堂、作業室などを見てまわった。途中、集会場で、両足のない車いすに乗ったおばあさんが、私達を見ると両手を合わせ、丁寧におじぎをした。それは、あたかも何かを拝むようで、何かとても悪いことをしてしまったかのように感じた。ベットに寝かけた人々も無邪気に手を振ってくれていたが、セントサ島で戦争博物館を見た後だったので、とても複雑な心境であった。

どちらかと言えば、再交流よりも、シンガポール事情を学ぶ研修的な色彩が強かったが、たいへん有意義な１０日間であった。プログラムを作る側から参加者側にまわったことで、今まで気がつかなかった点も発見することが出来た、今後、この経験を役に立てたいと思う。

最後になってしまったが、この貴重な体験をする機会を与えて下さった国際協力事業団と、素晴しいプログラムをアレンジして下さった同窓会の方々にお礼を述べたい。

ありがとうございました。

岩　元　厳　男

私が最初にチャンギ空港に立ち寄ったのは、モルジブ共和国から帰国する時であった。その時の驚きと強烈な印象は今でも鮮明に記憶している。限られた時間のため、残念ながら外には出られなかったが、空港内部は機能的で明るく、清潔感にあふれ、どの出発ロビーも広々としていて安らげる雰囲気であった。そして中央のオープンスペースには、黄色、ピンク、紫などの蘭の花が咲きほこり、まるで花園に舞い下りた感じであった。入国管理官のチエック状況か

らは、旅行者を心から歓迎しているように思われた。何と素晴しい国だろう！　どの様な人々が住み、どの様な生活をしているのか、この美しい国を是非一度は訪れてみたいと願いながらシンガポールを通過したのが１９８１年であった。

宮崎県内に於て国際化の必要性が叫ばれる様になった１９８３年、アセアン青年招へい事業が打ち出され、この「２１世紀のための友情計画」を宮崎県内で受入れるための努力が各関係機関へ積極的になされた。こうした関係者の理解と協力によって、１９８４年度から宮崎県には、幸運にもシンガポール都市勤労青年グループ２５名を受け入れることとなった。

この友情計画を通じて、シンガポールの青年達と会えるということで、期待と不安を胸に抱きながら受入れ準備を進めていった。ホームステイの受入れ家庭を初め、県内の国際交流団体や各市町村の協力を得て、研修、観光、交歓交流のプログラムやホームステイプログラムなど実に変化に富んだ地方プログラムが計画されたのであった。

そして、翌年もシンガポール都市勤労青年グループを受入れさせて頂く事になり、いよいよ、宮崎県内受入れ５ケ年計画に沿って、本格的にプログラムが展開されていった。

１９８７年から始まった、宮崎とシンガポールとの親善交流事業に於ては、現地プログラムの受入れ準備、学校や職場への案内そして自宅へのホームビジットや、観光案内をして頂くなど、惜しみない協力を頂いた。そして親善交流パーティには７０数名のシンガ青年が出席し、ホストファミリーとの再会を喜び合ったものである。彼らの暖かい心づかいや献身的なもてなしに、ただただ頭の下がるおもいであった。

これまで、５ケ年間を通じて宮崎を訪れ、ホームステイを経験した１１８名のシンガ青年は、この様に親善使節団との交流に対しても、各自が積極的に参加しており、シンガ国でも再交流の気運は回を重ねるごとに高まりつつあった。

こうした民間レベルでの再交流を継続して行うには様々な効果的な方法が考えられるが、それなりに問題点や改善すべき事なども出てくるものと思われるのである。

例えば、今後、より多くの相互交流が現地に於て実施されるようになると、必然的に彼らの個人負担が増大するようになり、それぞれの態度に変化をきたすことも予想される。私達は、受入れ団体組織の必要性を感じるとともに、この問題解決の糸口を探る意味でも、シンガ国における彼らの実情を把握し、彼らの置かれている立場を理解したいと考えていたのである。

丁度、この様な時期にＪＩＣＡのアフターケア調査団として、シンガ国を訪れるチャンスを得られた事は実に幸運であった。

調査団員５名がチャンギ空港に到着したのが深夜にもかかわらず、ＪＩＣＡの石崎所長を初め２０数名のシンガ青年の歓迎を受けたのには本当に驚いてしまった。

こうして真夜中から開始された１０日間の日程は、毎日が内容の濃いプログラムで組立てられており、私達は貴重な経験と多くのことを学ぶことが出来た。

１１月３０日プログラムの打合せの為ＪＩＣＡ事務所を訪れたが、所長は不在であった。現

地職員の話によると、サイクロンによってバングラ、マレーシア等が大被害を受けているため緊急物資の発送に行かれたとのことであった。

暫くすると所長が帰って来られ、シンガポールにはアジア、太平洋地域の天災に対する緊急援助物資の備蓄基地が日本のＯＤＡによって設置されており、これまでに、ビルマ、中国、スーダン、ネパール、バングラへの被災地に向けて援助物資が空輸された事などの実績や実情を詳しく説明された。

日本の国際緊急援助の実態として、日本の新聞等では緊急援助の手ぬるさが絶えず報道されているが、ＪＩＣＡシンガポールでは、所長自らポケットベルを持参されており、こうした２４時間体制によって何時でも被災国へ緊急物資が空輸出来るシステムとなっているのである。

私達は、今回の発送の速さに感心させられたばかりでなく、現場の苦労や厳しさを通して国際協力の原点を教えられた思いであった。

今回、私達は、外務省や文部省などの関係省庁をおとずれ、２１世紀友情計画に対する政府の考え方を聞く事が出来た。どの省庁でも、この事業が５ケ年延長されたことに大きな喜びと関心を持っており、また同時に帰国青年の今後の活躍にも大きな期待が寄せられていた。

シンガ国の基本的政策について各省庁で講義を受けたが、多民族国家としてのシンガ国の実態を正確に把握する事は非常に難しい事だと感じた。この国は、日本だけでなくアセアン諸国や多くの開発途上国にとって重要な拠点であることを認識することができた。

帰国青年の活動として、シンガポール・アセアン日本２１世紀友情計画の同窓会（ＳＡＪＡＦＡ－２１）が設立され、シンガ国に於ても広く認知されており、各省庁から絶大な信頼を得、その存在価値は私達の想像以上のものであった。

シンガ同窓会のスタッフは、インドネシア、マレーシア等の同窓会組織との連携を積極的に押し進めており、アセアン諸国において先導的役割を果している。

１０日間の日程を通して、最も心強くそして嬉しく感じられたのは、同窓会のスタッフがそれぞれの役割を分担し、私達と行動を共にしてくれた事である。こうしたキメ細い配慮は、私達を大変リラックスさせ、プログラム全てが楽しいものとなった。また、昼夜を問わずして、彼らと一緒に活動する事によって親近感が益々深められ、何でも本音で語り合えるような間柄になれた。

夕食会の席では、同窓会の役員と今後の再交流の在り方や実施方法についての話になり、同窓会としても受入れに対して積極的な姿勢であることがうかがわれた。事前に日程内容や参加人数など、ＪＩＣＡ事務所か同窓会に連絡してもらえばすべて対応出来るとの有難い返答をもらったまでは良かったが、側で聞いていた会長いわく、大変残念だが財源の協力はかんべんして頂きたいとの言葉には全員爆笑させられた。私のテーブルは夕食会というより、むしろ楽しい雰囲気の親善使節団受入れ会議みたいなものであった。

こうしてお互いに胸襟を開いて話合えることは素晴しいことであり、これも２１世紀のための友情計

画によってもたらされた大きな成果の一つであると考えられる。この人的交流による心と心の交流の大切さを身をもって痛感した次第である。

２１世紀のための友情計画によって、個人レベルでの国際交流の機会が多くの青年に与えられて来た。こうした共通体験を有する同胞が再交流を通じて、それぞれの文化を重ね合わせ、そして継続的に磨くことによって異文化を越えた新しい文化共同体をつくり上げる事が今後の課題であり、同窓会として果すべき役割ではなかろうか。２１世紀の平和社会の創造に向けて努力していきたい。

前　田　孝　博

今回の訪問で、まず驚いたと同時に感激し、恐縮したのは、シンガポール到着が夜中、正確には午前２時近くだというのに、石崎ＪＩＣＡシンガポール所長が到着出口に、そしてロビーには、横断幕を持った同窓会の青年たちが大歓迎をしてくれたことであった。諸事情により、到着時間が深夜となり、出迎えをしていただいた皆さんにご迷惑をおかけしたことに対し、まずお詫びいたします。

まず省庁訪問で感じたのは、各省庁ともオフィスが広く清潔で、机等も効率的に機能できるように配置され、各自が仕事に集中できる環境になっていたことである。

講義の進め方については、各省庁とも、最初にフィルム、又はスライドを使って活動の説明をした後、テーマについて講義するという方法をとっており、その省庁の全体像をつかむには、分かりやすい方法であった。日本の民間企業では、この種の方法をとっているところも多いのであろうが、省庁ではどうであろうか。

また、シンガポールに限らず、多民族国家の特徴かもしれないが、国家が国と国民とのつながり、すなわち国家意識の育成に非常に力を入れていることである。また国民も努力していることである。日本では、愛国心とか国家意識そのものを言動すること自体が、はばかられる状況であるが、今回の訪問で、国家と国民の関係について改めて考えさせられた。

次に、地域活動が盛んに行われていたことである。それもほとんどがボランティアで運営されており、ここでも国造りに対する意欲が感じられた。コミュニティセンターも各所にあり、多種のプログラムが用意されて、夜９時ごろまで開放されていた。プログラムの１つである合唱のサークルでは、子供たちがシンガポールの国歌とコミュニティセンターの歌を何度も練習していた。

教育についても、人材育成に対する国家の意気込みが感じられた。例えば、シンガポールに２つある工芸学院の１つであるニーアン工芸学院（日本の工業高等専門学校にあたると思われる）の見学では、教育科目はもちろん、施設においても、清潔な環境の中で、国の援助のもとに非常に充実しており、学生からも何か自信に満ちたような感じを受けた。

シンガポール全体からうけた印象は、躍動感である。東南アジアの他の国々とは異なった感じをうけた。中国系住民が多く、同じイギリス文化の影響をうけていながら、香港とも違った

感がある。いずれにしろ、シンガポールから、シンガポールの人々から学ぶことが多かった今回の訪問であった。

柴　田　満　美

シンガポール、と言うと必ずかえってくる言葉は「きれいで、ゴミ一つない」というのばかりであるため、初めての日は緊張して、ゴミを落とさないよう、気を付けていましたがタバコの吸いがらやくずなどがチラホラ落ちているため、妙にホッとしました。

１０日間といっても実際あちらですごしたのは８日間で、スケジュールはとても時間的につまっていて、多少精神的に疲れるものがありました。内容はとても充実はしているのですが、なにせ時間がないため、聞きたいことも聞けず、この点に関しては残念でした。

私達の受入をして下さった同窓会の方々はかなり自分達の時間をさいていただき、本当に感謝するばかりです。

私達の後に続く、第２、第３回目の人の時には、最低でも１５日以上の日数をかけた方がいいと思います。あと今回のプログラムに協力していただいた皆様、本当にありがとうございました。

倉　田　聡　子

シンガポールは、独特の、活気に満ちてしかも雑然とした、懐しいような部分も残しているが、別の面では日本の先を行く進んだ国であった。都市計画、環境（緑化）、女性の社会進出、オフィスの美しさ等の面では日本は遅れていると痛感させられた。ＳＤＵの局長の言葉にもあったが、まさに儒教文化と西洋文化の長所の相方を採用しながら、全体としては古い儒教文化に回帰せず、西洋文化の良い面に傾倒していってるようで、それがまた成功しているように見えた。同じアジアの国ながら、考え方や行動のちがいをそういう面でとりわけ感じ、時にうらやましく感じた。

ところで、今回の調査団は５名と少数であった分、責任の重さを感じさせられた。特に、行く先々での丁重な扱いは準ＶＩＰなみで、どこでも歓迎を受けたので、私自身は振舞いにも緊張したが、同時に光栄にも思えた。

滞在中の全てのスケジュールは実にスムーズに運んだ。それにはＳＡＪＡＦＡと、ＪＩＣＡシンガポール事務所に負う所が大きかった。真夜中の空港出迎えをはじめとして（横断幕とランの花で、約３０名が出迎え）、毎日の訪問先同行、食事の設定から勘定の支払いまで、すべて慣れない私達に何の不自由も感じさせなかった。むしろ有休休暇を私達の為に使ってくれた事や勘定の支払いの面で、悪いなという気持ちが強い。この点は今後の体制作りに考慮して頂きたいポイントである。

日程は朝から深夜までつまっており、私の場合ホームステイも大変忙しかったこともあって、滞在中は体調を崩し、また帰国直後も大きな疲労が残った。この点は唯一つらかった事である。日程により余裕があればと思われる。

また、日本で原爆資料館を見学するように、シンガポールでもセントサ島の戦争資料館は今後も見学先の１つとしてはどうだろうか。友情を育むためには、彼らの笑顔だけに甘えてはいけないし、むしろ日本人と彼らの戦争観にある溝を埋め、お互いをより理解しあえるのに役立つと思う。

しかし、実のところ彼らが何故私たちをあのように抵抗なく迎えてくれるのか、今回の滞在を終えて、素朴な疑問が残った。今度会う時には卒直にきいてみたい気がする。

私自身、この調査団の日程を自分なりに懸命にこなし、ただの１０日間でない貴重な経験を得られたと感じている。ＳＡＪＡＦＡとのつながりが出来た事も含め、業務上も、個人的にも得る所が大きいかった。気持ちの良いＳＡＪＡＦＡのメンバーに、再訪を待っているよと言われた時、今度訪れる時はまた違う面を見てみたいと貪欲に思う。今回、「面倒見の良い政府」のシンガポールを良く理解できたが、次回は悩めるシンガポールも理解したいものだ。

7. 提　言

提言は、次の６項目である。

Ⅰ　プログラムについて

(1)　期間は、実質２週間程度がよい。

(2)　派遣人数は、５人～１０人（相手側の負担を考えると、十分な対応ができる範囲は、この程度の人数ではないか。

(3)　１日の活動時間は、９～１７時とし、夜はできるだけ自由時間にする。

(4)　自由行動日を、プログラムの期間に合わせて、少なくとも丸１日、できれば２日間入れてもらいたい。２日間とる場合は、日程の前、後半に１日ずつ設ける。

(5)　通訳は、講義のみでなく、表敬、見学先にも同行してもらいたい。できれば滞在期間中お願いしたい。

(6)　見学先で質問できなかったことや、反省等を含めた、その日１日のまとめの時間を設ける。

Ⅱ　食事について

(1)　朝と夜は、各自自由にした方がよい。

(2)　昼食については、レストランではなく、ホッカーセンターで十分である。

(3)　相手側の負担にならないように、食事代の支払い方法については、プログラム作成時点で決めていた方がよい。できれば、自己負担にならないように要望したい。

Ⅲ　ホテルについて

(1)　ホテルについては、予算を示して、先方（ＪＩＣＡ事務所、同窓会）にアレンジしてもらう方がよい。

(2)　安全面で信頼できれば、３つ星程度のホテルで十分である。

(3) 交通の便を考える。例えば、ＭＲＴ（シンガポールの地下鉄）の駅の近くにあることなど。

(4) わかりやすい場所にあること。

(5) チエックイン、チエックアウトの時間、荷物の保管等の融通のきくところがよい。(その点で、今回滞在したホテルは、かなりの融通がきいた。)

(6) 宿泊代については、できれば全額日本側にお願いしたい。（特に、学生の派遣団員には負担になる。）

Ⅳ 訪問先等について

(1) 訪問については、午前と午後、それぞれ１個所ずつがよい。

(2) 省庁だけでなく、民間の施設もできるだけ多く入れて、民間の人々との交流を広げた方がよい。

(3) 講義については、質疑応答の時間を十分に取った方がよい。

(4) 質疑応答では、できるだけ本音で返答してもらいたい。

(5) 訪問先に、学校もいくつか入れた方がよい。

Ⅴ ホームステイについて

(1) ホストファミリーについては、家族構成など事前に情報が欲しい。

(2) 日程が１０日間であれば２泊、２週間であれば３泊程度を週末に実施するのが望ましい。

(3) ホームステイ中は、共通のプログラムは入れない。

Ⅵ その他

(1) 日本出発前に、ある程度のシンガポール事情の勉強会を開き、派遣前のオリエンテーションの充実を計った方がよい。

(2) 交流の目的、派遣団員の職種、年令等を考慮して、プログラムを作成した方がよい。

(3) シンガポール到着時刻は、出迎えを考慮して、１９～２１時の間がよい。

(4) プログラムについて、現地同窓会にアレンジを依頼するのであれば、数か月前から連絡を取り合い、相互に要望を調整した方がよい。

(5) 若い年令層の交流をふやす。

(6) 先方に、金銭的負担をかけないようにする。

(7) 連絡窓口を一本化するために、シンガポールを訪問するグループがあれば、SAJAFA宛（住所はＪＩＣＡ事務所と同じ）に連絡した方がよい。

8. 総 括

今回のプログラム作成に当たっては、日本側から訪問先、見学先等の要望事項をシンガポール側の同窓会へ送付し、その中からシンガポール側で対応できるものをピックアップする

という形で作成を予定していたが、シンガポール側の熱心かつ迅速な対応により密度の濃いものとなった。これも同窓会、及び関係者の相互交流に対する熱意の現われであり、相互交流のもつ意義について改めて痛感した次第である。

プログラムの消化に関しては、同窓会関係者が毎日３名ずつ同行してくれ、訪問先との応対もスムースに行われ、不都合を感じたことは一度もなく、むしろ彼らの手際のよさに感心させられることが多かった。また、訪問先での講義・討議の際でも同室し、相手方もそれが当たり前のように応対していたことに非常な好感を持った。そして、いずれの訪問先でもあたたかく迎えられ、質問にも熱心に返答してくれ、予定時間を超えることもしばしばであった。また、表面的ではあったが、ホームステイを通してシンガポールの人々の生活、文化に触れられたことは、非常に有意義であった。

最後に、１０日間の日程を無事終了し、交流を深めることができたのも、同窓会関係者、国際協力事業団、及び日本側関係者の多大な努力、労力によるものであり、ここに深く感謝し、今後の両国間の交流が、草の根的なレベルで充実していくことを強く希望する次第である。

調査日程

○１１月２９日（火）

１９：００	シンガポール航空１１便にて成田空港出発

○１１月３０日（水）

１：１５	シンガポール、チャンギ国際空港到着
２：３０	ペニンシュラホテル、チェックイン
１４：３０	ＪＩＣＡ事務所へ移動
１５：００～１６：００	同窓会（ＳＡＪＡＦＡ２１）によるプログラム説明
１６：００～１７：００	ＪＩＣＡシンガポール事務所についての説明
１７：００	ホテルへ戻る
１８：３０	マンダリンホテルへ移動
１９：００～２２：００	同窓会主催歓迎夕食会
２２：００	ホテルへ戻る

○１２月１日（木）

１０：００	ホテル出発
１０：３０～１１：００	外務省アセアン局長表敬
１１：４０～１２：００	日本大使館　公使表敬
１２：３０～１３：００	昼食（ラサ・シンガプーラ）
１４：３０～１６：００	人民協会事務局長表敬、ゲランウエストコミュニティーセンター見学
１７：００～１９：００	アンモキオ西部地区協議会

１９：００～２０：００　夕食

２０：３０～２２：００　ケブンバルコミュニティーセンター

○１２月２日（金）

８：００　ホテル発

８：３０～　９：００　朝食（ＷＴＣホーカーセンター）

９：００～１４：３０　セントサ島観光（戦争資料館など）

１４：４５　ホテルへ戻る

１５：４５～１７：００　住宅開発局訪問「シンガポールの住宅事情」

１７：３０　ホテルへ戻る、ホストファミリーへの引渡し

○１２月３日（土）　全日ホームステイ

○１２月４日（日）

昼　～　夜　ペニンシュラホテルにチェックイン

○１２月５日（月）

９：３０　ホテル出発

１０：００～１１：００　教育省訪問「シンガポールの教育制度」

１１：３０～１３：３０　ニーアン工芸学院（施設見学、昼食会）

１４：３０～１６：１５　普覚寺修身院（老人ホーム）

１６：３０～１８：００　社会開発省訪問「多民族国家における住民委員会の役割」

１９：００～２０：００　夕食

２０：３０～２１：３０　チョンバン住民委員会

○１２月６日（火）

９：３０　ホテル出発

１０：００～１３：３０　国家生産性庁訪問「ＱＣＣ」（施設見学、昼食会）

１４：３０～１６：００　資源開発公社訪問（ＱＣＣとの意見交換会）

１７：００　フリー

○１２月７日（水）

９：３０　ホテル出発

１０：００～１１：３０　サイエンスセンター見学

１２：００～１４：３０　昼食、フリー

１５：００～１７：００　大蔵省社会開発局訪問「結婚問題と社会開発局の役割」

１７：３０～１８：１５　フリー

１９：００～２２：００　ＪＩＣＡ主催さよならパーティ（マンダリンホテル）

２３：００～２３：４５　プログラム評価会

○１２月８日（木）

７：００	ホテル発
７：３０	チャンギ国際空港着
９：００	シンガポール航空１２便にて出発
１６：３０	成田到着

タ　　イ

S.63.11.29～S.63.12.8

(社)全国農村青少年教育振興会

1. 調査チーム派遣概要

1－1　調査チームの構成

① 藤　田　忠　雄　昭和３１年４月７日
茨城県土浦市乙戸南１－１４－８
（社）全国農村青少年教育振興会

② 崎　山　成　人　昭和２７年１月１５日
神奈川県川崎市高津区末永１４６－１　姿見台スカイハイツＡ－４０２
（財）合気会

③ 中荒井　　正　昭和３７年１０月１３日
栃木県鹿沼市藤江町９１１
鹿沼市青少年クラブ協議会

④ 吉　持　秀　紀　昭和３５年８月１９日
鳥取県西伯郡会見町田住５２９
鳥取県農村青年会議

⑤ 赤　名　政　美　昭和３３年２月２７日
島根県仁多郡横田町大字大馬木７２８
島根県農林改良青年会議連絡協議会

1－2　調査日程

昭和６３年

１１月２９日　１０：３０　タイ国際航空６４１便にて成田空港を定刻にて出発
（火）　１５：２５　バンコック国際空港に定刻にて到着
１８：００　YMCAホテル着

１１月３０日　１０：３０～１２：１５
（水）　JICAバンコック事務所表敬
１２：１５～１３：４５
昼　食
１４：１５～１５：００
総理府青少年局訪問
１５：００～１７：１５
市内見学
１７：３０　YMCAホテル着

１２月　１日　１０：００～１２：００
（木）　同窓会との懇談（NYB）
１２：００～１３：３０

同窓会役員との昼食

14：00～15：30

プラティープ財団訪問

16：30　YMCAホテル着

12月　2日　7：30　YMCAホテル発

（金）

9：50～10：40

ANGTHONG県SAWAENG－HA地区農業改良普及所訪問

11：30～13：15

マラノップ氏果樹園訪問（来日農村青年）

13：30～14：30

農業改良普及所職員との昼食

15：30　バンコックへ移動

12月　3日　10：00　YMCAホテルにホームステイ家族出迎え

（土）　ホームステイ

12月　4日　終日ホームステイ

（日）

12月　5日　ホームステイ

（月）

17：00　YMCAホテル着

12月　6日　9：30　YMCAホテル発

（火）

10：00～12：00

FOREMOST（乳製品工場）訪問

12：00～13：00

FOREMOSTにて昼食

14：30～16：30

セミナー（YMCA）

12月　7日　10：00～11：00

（水）　JICAバンコック事務所及び日本大使館報告

11：30～帰国準備

12月　8日　11：15　タイ国際航空640便にてバンコック国際空港を定刻にて出

（木）　発

19：00　成田空港に定刻にて到着

1－3　主要面談者

○国際協力事業団　タイ事務所

斉藤　勉　所長

原　智佐　職員

○日本大使館

井原勝介　一等書記官

○総理府青少年局

①　ハックティ　次長（外国担当）

②　スィノーサン　部長

他青年招へい事務担当職員５名

○同窓会との懇談

①　PRASERT KONGKWAN

他NYB職員５名

○プラティープ財団

①　アルニィン　広報担当

②　ワッサナン　奨学金担当

他ボランティア青年３名

○ANGTHONG県SAWAENG－HA地区農業改良普及所

①　VORAPHONG NCILTHA NYAKORN　所長

他職員２名

○来日農村青年

①　マラノップ

○FOREMOST（乳製品工場）

①　ONSUPA MANG　広報担当

②　VIRA VATCHARASIRI　技術担当

③　SUPAT NATNOI　来日青年

④　SINGCHAI SURINSAP　来日青年

○セミナー

①　NOPPAVAN PHUVAPRA DITCHAI（昭和６３年農村青年グループ）他１６名

2.　調査の要約

青年招へい事業におけるタイ国の派遣状況について、総理府青少年局において調査したことを以下に述べる。

1. 5つのサブ委員会の責任のもとにおいて、インタビュー及び申請書をもとに人員を選抜する。

① 学生グループ

② 青年指導者グループ

③ 勤労青年グループ

④ 農村青年グループ

⑤ 芸術関係グループ

2. 現地プログラム

選抜された青年は、委員会の責任ある管理のもとで、日本に来日する直前に、青年招へい事業の準備のためにオリエンテーションを行う。現地プログラムは6日間行い内容は以下の通りである。

① プログラム内容

1) 日本・アセアン・タイの実情

2) 日本とタイにおける国際関係について

3) 日本の文化・習慣（食事の仕方・はしの使い方）の習得について

4) タイ国における農業関係機関の視察

5) あいさつの練習

6) タイ国の文化（タイダンス等）の練習

7) 日本語の学習

② 科　目

1) オリエンテーション

2) 日本のエチケット

3) 日本事情

4) 日本とタイの関係

5) タイに関するデーター

6) アセアン諸国の事情

7) 各グループごとの最低の常識

8) 各関係機関への見学

また、農業青年グループの選抜方法としては、１８才～３０才までの青年で、各村・各町・各郡・各県の地方委員会で選抜され、最終的にはバンコックの委員会において最終決定する。

構成メンバーとしては、総理府青少年局よりリーダー及びサブリーダーの２名及び各グループに１人のジャーナリストを派遣し、７２の県から推せんされる青年は、農業省・農業改良普及員及び地方において、青年のリーダーとして活躍する農業者のなかから選抜する方法がとられている。

3. 現地活動報告

3－1　表敬、訪問先における意見交換内容

(1)　JICAタイ事務所

１１月３０日、午前に訪問、場所は日本大使館の一角にあり、３F建ての大きな事務所で立派なものだった。

JICAタイ事務所においては、タイ事務所長斉藤勉氏に、今回のタイ国アフターケア調査チームの目的と協力に対してお礼を述べたのち、事務担当者の原智佐氏より、日程のオリエンテーション及びホームスティの受入家族のリストを受け取り、通訳のSUTHEE・PHANAVORN（スティ・パナウォーン）氏の紹介を受けた。しかしここでの日程説明は簡単なものであり、バスの手配・タイ国におけるチップの習慣等の説明を受けた。

(2)　総理府青少年局（NYB）

タイ国青年招へい事業の担当窓口である総理府青少年局を１１月３０日午後訪問した。総理府青少年局７名、アフターケア調査チーム５名、通訳１名の計１３名が参集して、１４：１５より行なわれたが、局次長が多忙なため、４５分程しか時間がなく、充分な話し合いが行なかれなく、総理府青少年局側からの要望に終始した。

総理府青少年局ハックティ局次長（外国担当）より、青年招へい事業に対して感謝している旨のあいさつがあり、要望としては以下の点があげられた。

①　青年招へい事業における招へい形態

従来のアセアン混成グループを、各分野ごとに招へいすることにより、アセアン諸国の実情を相互に知ることになり、今まで以上に日本とアセアン諸国の理解と協力を得ることができる。また、青年の船のように、各国の青年が一堂に会して寝食を共にすることにより一層の交流を計りたい旨要望があった。

②　内　　容

青年招へい事業の内容をもっと深く、専門的な日程を期待したい。また、見学場所においても、文化的な見学よりも学術的な見学をしたい希望があり、特に農業青年に関しては、日本の農家の生活を実際に体験したい。

③　通　　訳

通訳についても１人しかいないので、時間の制約もあるので説明が不十分であった。また通訳者が専門的なことが分らないという欠点があった。

(3)　ANGTHONG県農業改良普及所

１２月２日、バンコックの郊外、車で約２時間余りのアンソニー県の農業改良普及所を訪ねた。

この県は、４９４村に別れ、人口は２６４,５５４人でうち農家数は４０,０３７人とい

う農業県である。現在、所得の向上を目指し稲作主体の農業から野菜・果樹中心の形態に移行するよう指導している旨農業改良普及所長より説明があった。

また、農業組織は以下のとおりである。

- 農民団体（生産組合）

４７団体　　6,１０８人

- 婦人団体

６０団体　　1,１５９人

- 青年団体（４Ｈクラブ）

５２団体　　７２８人（男３３３人、女４４９人）

顧　　問　　１１０人（男１０４人、女　　６人）

また、来日青年として訪ねたマラノップ青年が当普及所の、青年団体の有力なメンバーであったので青年団体について説明を以下の通り加える。

青年団体は、日本の４Ｈと基本的には組織形態は同じである。ただタイの青年団体の重要な役割として、義務教育を終了し、中学に進学しない青年たちを訓練する場であり、ここで訓練を受けることにより、将来何になりたいかの目的を持たせることがある。

プロジェクト活動も、個人・共同とあり、政府からもプロジェクト活動に対して「ヒナ」を支給する援助がある。

タイ国の後継者の問題としては、日本のように後継者不足でなく、仏教国ということで、財産は子供に均等に分配されるため、子供が多いタイでは農家の耕作規模が年々少なくなっていく問題がある。

(4)　FORE MOST視察

１２月６日、午前に来日青年の訪問ということで、乳製品の会社を訪問した。この会社は３２年の歴史があり、タイ・アメリカの共同出資の会社で、香港・台湾・パキスタンに支店があり、牛乳・アイスクリーム・ヨーグルトに至るまで幅広く生産している会社である。

会社の概要の説明ののち、青年招へい事業で来日した、２青年の案内により工場内を視察した。しかしコンピューターを導入した機械もあったが、人材がいないということでフル稼動していないなど問題があるように見受けられた。また新製品の開発については、日本では市場調査をしてから商品開発をするが、タイでは商品を生産してから市場の動向を調査するという方法を取っている。昼食時に、FORE・MOSTの製品を試食したが、日本人には甘いように感じられた。

また、この日は、約束の時間に車が来ないというトラブルがあり、急にタクシーで会社を訪ねるなどしたため、充分な交流の時間がとれなく、工場見学にだけ時間をとられてしまい、勤労青年グループで来日した青年との交流が、昼食と共に行なわれたので、

満足な成果が得られなかった。

3－2　帰国青年同窓会等の活動状況

１２月１日、１０時から２時間総理府青少年局の会議室において、同窓会との懇談を行なった。参加者は、タイ国側は同窓会を担当している２名の青年、総理府青少年局から法律関係者を含む来日経験者４名の合計６名、そして日本青年５名及び通訳１名の合計１４名であった。

各自自己紹介ののち、プラサート氏よりタイ国における同窓会の概要の説明を受けた。タイ国同窓会の概要は以下の通りである。

(1)　同窓会の現状

①　同窓会の組織は、正式に政府から認可されていない。

②　現在は、設立委員会を月に１回行っている。

③　同窓会としては、政府に正式に同窓会認可の申請を提出している状態である。現時点では、会員の名簿は提出したが、委員会の名簿がまだ出来ていない。

④　また、法律の関係で設立が遅れているが、時期については見とおしが立っていない。

(2)　同窓会の現在の活動

①　会員は青年招へい事業参加者全員である。

②　会員の間での連絡は密であり、個人的には会って活動している。

③　現在同窓会として広報紙を会員相互に送付している。広報紙の内容としては、同窓会の設立の進行状況・会員の近況報告等を中心に発行し、また日本語も教えている。広報紙に関しては、会員全員が非常に感心を持っている。

(3)　同窓会の資金

会員個人の資金援助で運営している。

(4)　同窓会活動の今後

政府に同窓会登録後活動を正式に開始する。活動内容としては、青少年のための活動及び広報紙の発行を考えている。また、登録後は、正式に会費を納入してもらうと同時に、何らかの援助も受けられるので資金面では充分な見通しがある。

(5)　国際協力事業団への要望

①　同窓会の登録後正式に総会を開催することになるが、総会に出席してほしい。

②　アセアン諸国の同窓会の活動内容・目的を参考にしたいので、総理府青少年局に送付してほしい。

③　国際協力事業団として、同窓会に対して期待するもの・目的があればその主旨に合わせるので送付してほしい。

④　同窓会で活動している青年の再来日を希望しているが可能性はあるか？

同窓会活動の説明ののち、アフターケアー調査チーム５名のプロフィール等が不充分であ

ったため、出身県などの質問を受け、日本の青年招へい事業に対する同窓会があるか等の質問に対しては、我々地方受入団体の説明をしたのち、日本側から、タイ国青年の動向・日常生活などの質問をし、なごやかなうちに同窓会との懇談会を終了した。

マラノップ青年の果樹農家

１２月２日、アントニー県農業改良普及所表敬ののち、１９８４年青年招へい事業でタイ国農村青年グループで来日した、マラノップ青年の果樹園を見学した。

マラノップ青年は、小学校を卒業したのち、地元のYOUNG・FARMER（４Ｈクラブ）に入り、農業の勉強をしプロジェクト発表により、数々の彰を受けるなど４Ｈクラブにおいて活躍し、現在４Ｈクラブの教育者のメンバーとして、また青年のリーダーとして村の目標となっている。

マラノップ青年は、青年招へい事業で京都府に来日した青年であるが、この事業に参加して、

1. 小さな耕作面積より、高い農業所得を得ていることを見ることにより、日本とタイの農業の違いを見ることができた。
2. 日本の農業は、農作業（肥料の散布・除草等）が非常にていねいである。
3. 農作業をするにあたり、計画的に作業をしている。

以上のようなことを、日本において学んだということである。

帰国後、日本での青年招へい事業の成果を各地区で講演をし、稲作中心の経営から、所得の向上を目ざした農業への転換を指導したが、実際にはマラノップ青年が資金不足のため果樹園への転換をしていないということで、各地区において受け入れられなかった。

しかし、２年前に、１２ライの土地を親から譲り受け果樹園を始めた。資金面においては、両親と農業財団から無担保で融資を受けることにより解決することができた。

また、果樹試験場において、果樹の適正試験をして、この土地にどの果物が適正かなど用意周到な計画のもとに果樹園の経営を始めた。現在は、非常に有効な土地利用をしている。例えば果樹の成木と成木の間に野菜を作り、果樹の苗木を生産・販売をして、果樹園が風の影響を受けないようにと、バナナの木で防風林を作るなど考えた農業経営を行うとともに、この地区は、盆地であり、排水路がなく、雨季になると水が溜まるという欠点があったが、この欠点も水が溜まると、地下に穴をあけて地下にもどすなど工夫をして解決し、また排水をよくするために水路を作り、ここに魚を放して養殖をするなど、合理的で綿密でなお、地の利を生かした果樹園の経営を行い、現在はタイ国のみならず海外からも果樹園を経営の参考に見学に来るなど、地元の青年のリーダーとして活躍をしている。

また、最後に果樹園を見学したのち、果樹園の訪問者すべてにおいて感想及び意見を書いてもらうノートを準備していて、我々メンバーに対しても、果樹園を見ての感想と助言を求めるなど、現在の経営に満足することなくよりよい経営を目ざす姿勢に感心させられた。

このような青年が将来のタイ国農業を支えていく１人だと思うと、日本農業もうかうかしてはいられないそんな気になるマラノップ青年の農家の訪問であった。

３－３　セミナー・交流会実施状況

１２月６日、２時３０分よりホテルYMCA内のRAJAVADEEルームにて、日本調査チーム５名、タイ国青年は昭和６３年度タイ国農村青年来日青年を中心として１７名、そして国際協力事業団バンコック事務所など関係者が参集してセミナーを開催した。

セミナーは、昭和６３年度タイ国学生Ｂ（農学系）グループで来日した、セッター氏による、「タイにおける農業の発展」と題してタイ国農業の紹介が以下の通りあった。

(1)　北部地方

果物・野菜・花の栽培が中心であり、果物はライチ・オニガカン栽培が盛んであり、またモルトを栽培してビールの材料にしている。

問題点としては、山岳民族が移動することにより、山林の伐採が問題となっている。

(2)　中部地方

チャオプラヤ河が町の中心を流れているもあり、タイ国における米の主生産地である。また、ダムが２つ、国際協力事業団及び政府の協力により完成したので、電気また水の問題が解決できたことにより、新たに肥料・農業技術の問題も解決しつつある。

①　北部 ― トウモロコシの産地であり、ひまわりなどが主な輸出品である。

②　バンコック近郊

工業が盛んであるが、野菜・ランなどをバンコック市民に供給している。

③　東部 ― 火山地帯であったので、土地が肥沃であり、タピオカ・ドリアンの産地で有名である。

④　海岸地帯

水が豊富なので、エビの養殖が盛んでいる。

また、森林の破壊による問題のなかで、ゴムの木を植えることにより、植林の役目を果すこともあり、ゴムの木を植林している。森林破壊が問題になっている北部地方も同様のことをしている。

(3)　東 北 部

塩害の問題があり、タイでは貧しい土地であるが、麻・トウモロコシの産地であり、塩分の多い土地では、ユーカリの木を植林したり、湖に魚を養殖したりしている。また２０万ライゴムの木を植林するなど、イサン・キオプロジェクトとして、政府・学者が多数東北部の開発に力を注いでいる。

(4)　南　　部

土地が南北に長く、山が多く海に面しているため農業よりも漁業が盛んであるが、ココナッツ・パームが主生産品であり、油をとるのが目的で生産している。またゴムも生

産している地域である。

総　　括

タイの農業は日本農業と違い土地労働型である。また農産物の価格は日本は政府が決定するが、タイにおいては、①需要と供給の変動が激しいこと、②マーケットのメカニズムが複雑、③マーケットを操作する人物がいる等の理由で価格決定が難しいとのことである。しかしタイ国においても農業学校・各種試験も数多くあり、品種改良も盛んに行なわれたことにより、果物・海産物の有数な産地である。

以上のようなタイ国農業の紹介がセッタ氏よりあったが、この講演でセミナーの大半を費やしてしまい、ホテルYMCAの関係で時間の延長が出来なく、残りの時間はコーヒー・ブレイクをはさみ、セミナー参加者とのフリータイムは２０分程度しかとれなかったが、我々日本調査チームとしては、農業関係者グループということもあり、タイ国農業の概要説明をこの日まで受けていなかったこともあり非常に興味深かったが、セミナーのもち方としては問題があったと思う。しかしこのセミナーにタイ国全土から１７名来日青年が参加してくれたことなど、またその日の夕食を一緒にとるなどを考え合わせれば、我々アフターケア調査チームの目的の１つである来日青年との再交流としての面では目的を達することが出来たと思う。

また、鳥取県からこのチームに参加した吉持秀紀さんによると、このセミナーの短いフリータイムにおいて、ホームステイで世話になったクハァンルアンさんよりタイ国参加者を紹介してもらい、楽しい時を過ごすことが出来たと言うことと、彼女に「貴方の夢は何ですか？」の質問に対して彼女は「もう一度日本に行くことだ。」と笑いながら言っていたことが、タイ国青年全員の気持を代弁しているように思え、特に印象的であったということを付け加わえておくことにする。

３－４　ホームステイ実施状況

我々アフターケア調査チーム５名は、１２月３日（土）から１２月５日（月）までの２泊３日間においてホームステイを行った。ホームステイの名簿は以下の通りである。

(1) 藤　田　忠　雄　　茨城県

Mrs. Noppavan Phuvapraditchai

１９８８年青年招へい事業・農村青年グループリーダー

(2) 崎　山　成　人　　神奈川県

中荒井　　正　　栃木県

Misskanittha Moonthongchon

１９８７年青年招へい事業・青年指導者グループ

(3) 吉　持　秀　紀　　鳥取県

Miss. Khanrune Khamprathom

１９８８年青年招へい事業・農村青年グループ

(4) 赤　名　政　美

Mr. Wichan Duangpan

１９８８年青年招へい事業・農村青年グループ

＜ホームステイについての感想＞

茨城県　藤　田　忠　雄

私がホームステイでお世話になったのは、昭和６３年１０月に来日した農村青年グループのリーダーで、総理府青少年局の公務員であるノッパワンさんであった。この農村青年グループは、私共全国農村青少年教育振興会が実施団体で私がプログラムリーダーとして約３週間一緒に行動したため、国際協力事業団バンコック事務所の打合せでホームステイの名簿をもらった時正直安心した気持ちであった。

ホームステイは、ホストファミリーが１０時までにホテルYMCAに迎えに来るとのことで、我々全員フロントで待っていたが、各自タクシーやワゴン車で出迎えに来てくれて各自別々に、期待と不安の中ホームステイに向かって行った。

私はノッパワンさんとは、総理府青少年局表敬時、同窓会との懇談会とタイ国に行ってから２回会う機会があったので、ホームステイにおける日程は聞いていたので不安はなかったが、当日はノッパワンさんが来日した時のサブリーダーチャレムさん・彼女の友達ワンチャートさんと３人で出迎えにきてくれて、映画「戦場にかける橋」で有名なクワイ川の流れる町カンチャナブリに車で向かった。

バンコック郊外のレストランで昼食をとったのち、バンコックから約３０㎞にある、美しい花が咲き乱れる大民俗村ローズ・ガーデンにおいて「タイ・ビレッジ・ショー」を見学した。ショーはタイの民族音楽や伝統舞踊、習慣や儀式・タイ式ボクシングや闘鶏などの紹介があった。ローズガーデン見学後、同じく１０月に農村青年グループで来日したクノウットさんと合流し、彼のオフィスである、農業改良普及所に向い、普及所の一角にある宿泊施設の伴もなった研修施設に荷物を置き、クノウットさんの案内でカンチャナブリの町へ夕食を取りに入った。

バンコックから約５０㎞にあるカンチャナブリに来たのは、観光もふくめて、クノウットさんに会いにくるという目的であり、夕食時も日本語や日本に来日した１ケ月間の生活の想い出を話すなど、非常に楽しい一時を過すことができた。特に来日した、３人の青年たちは日本語を覚えていて日本語で話してくるなど非常に気を使ってくれ、クノウットさんは再会出来たことを非常に喜んでくれ大歓迎をしてくれた。

第２日目は、クワイ川の鉄橋を見学に行き、列車を通るのを待ったが時間の関係で見ることは出来なかったが、昼食後に、連合軍兵士が眠る共同墓地を墓参し、クノウットさんと別れを

つげて我々３人はバンコック市内にもどり、ラマ５世（チェラロンコーン王）によって建立された、バンコック市内では最も新しい寺院を見学したのち、夕食をチャオプラヤ川に船で乗りだし、近くを船が往来するなか、市内の夜景を見ながら夕食をとり、市内でチャレムさんワンチャートさんと別れ、市内から約２０㎞のノッパワンさんの自宅に行き、この日は夜遅く訪問したが、彼女の兄さんと会い、日本のお土産を渡し自己紹介をし、しばしの歓談をした。

第３日目は、１２月５日で国王の誕生日ということもあり、午前中世界最大のクロコダイル・ファームにおいてワニ・象などのショーを見学し、バンコック市内において買物に連れて行ってもらうなど、一般の家庭生活を楽しむことができた。また約８０haの広い敷地は、タイの国土をかたどったもので、タイの代表的な寺院など古今の建物を縮少復元した建物が点在し、公園全体がタイの歴史や再現した歴史博物館であり、建物は、古代のタイ人の暮らしや生活様式をしのばせる遺跡から、かつて栄華を誇ったスコータイ王朝やアユタヤ王朝の華麗な王宮まであり、人工池には水上マーケットも再現されている古代都市公園に行ったが、祭日ということもあり多数の人が見学に来ていたため、駐車場がなくすぐに帰宅した。

この日は、ノッパワンさんの兄弟が、１日一緒に行動をしてくれ、さりげない接し方の中にも、非常に好意的に歓待してくれ、当初不安であったホームステイを楽しく過ごすことができた。

ホームステイは、日本でもありがちであるが、２泊３日観光になってしまい、タイの家族の生活は味わうことはなかったが、金銭面において多大なる迷惑をかけることになってしまったので、来年度からはタイの家庭生活を体験するような方向にすべきであると思う。

また、当初１人１家族ということで、タイ側に要請したが、結果的には、４家族になったがその理由としては、ホームステイの家族は中流以上の家庭でありホームステイの受入れが迷惑にならないように考慮するようにすべきである。しかし今年度来日青年ということで、交流もスムーズに行き、とくにバンコックにおいて再会できたということを非常に喜んでくれ、なお歓待してくれたことが印象的であった。

神奈川県　　崎　山　成　人

ホームステイでお世話になった家族は、昨年７月～８月、日本に来てホームステイの経験を持つ２２歳になる公務員の女性で名前は「カニタ」ニックネームは「ドウ」という人でした。彼女は軍人である父親と母親の３人家族で、また２人のメイドを持つ中流以上の家庭で育ったようだ。

１２月３日（土）は、宿泊場所のYMCAに彼女の姉（２６歳・今年結婚）とボーイフレンドと３人で迎えに来てくれた。（彼の名はピーラポン、大学で体育教育学を専攻している２６歳の好男子である。）一路タクシーで彼女の家へと向った。途中彼女の父が兵士であることを聞かされ興味をいだかされた。車中２人の女性は必死で英語とタイ語の対話の辞書を片手に話し

かけてきた。市内でピーラポン君はバスケットのレフリーを務めるとかで車を降りた。２０分程で軍の施設のゲートにさしかかった。３人ぐらいの兵士が検問のため立っていた。とにかくそこは、タイの一般人でも出入が自由でない場所で、まして日本人の私にとって不安になるくらい非日常的な軍用自動車、迷彩服の兵士の姿を目のあたりにした。敷地内はタクシーの代わりに、オートバイが使われていた。約１５円である。もっとも後に乗っけてもらうのであるが、ゲートより５分程でYMCAからのタクシーは、彼女の家についた。官舎が建ちならぶ一角で、建物は１・２階専用の長屋でいわゆるタウンハウスであった。そこで彼女の母親とタイ式の挨拶をした。シャワーを浴びろとの事でそのシャワー室を見るとタライが有り水道からホースで水を引いていた。そばには背中のくびれた亀のようなものがあり想像するにこれは手動式水洗トイレと考えられたが、その時点では使用する気になれなかった。まもなく父親が外出から帰って来た。軍人らしくピシッと背すじが伸び、立派な体格をした人物であった。

午後から姉妹とバンコック市内に出かけ昼食をごちそうになったが、やはり年下の女性に奢られるのはいやだ。

昼食後、タイ国王の誕生日を２日後にひかえ、ラマ５世像が立つ大通りで兵士のパレードがあるということで、それを見に行くことになった。２時間以上前からロイヤルボックスや外国のＶＩＰがいる反対側の沿道には多くの人々が集まっていた。どの国の女性も同様なのか、ハンバーグやホットドックを食事にしていた。私たちにもまもなく買って来てくれた。

３時３０分パレードが始まり、色とりどりのユニホームを着た兵士が軍音楽隊を先頭に毅然とした行進を行った。国歌斉唱の後国王のお言葉があった。約２時間のセレモニーの後帰路についた。

彼女の家に着くと昨年来日した時の写真集を見せてもらった。その顔は初めて見る日本にはしゃぐ若い娘のそれであった。まもなく父親が帰って来た。さっそく今日の行進に使った礼祭用の軍服を着せられ写真を撮るようすすめられた。軍人であることに非常に誇りを持っているのが感じられた。夜、彼女のおじさんの運転する車で町へ出かけ道の木々や建物は電球で色どられ非常にきれいなイルミネーションを見ることが出来た。

翌朝、グランドパレスにつれて行ってもらった。そこで昨日のピーラポン君と会い、彼にガイドしてもらうことになった。

さすがタイ、王室専用礼拝堂があり、タイ仏教の総本山らしく黄金に光り輝き目をみはる王宮である。さしずめ我々日本の日光というべき感じがした。約２時間の見学でしたが印象にのこる体験であった。

３時頃家に帰って来たが夕方にはまだ時間があるので、ピーラポン君と彼女は軍の施設を見せるため車で敷地内を案内してくれた。タンクや軍用トラックがあっちこっち並べてあった。その中に礼拝堂があり、日本でいう「おみくじ」が用意してあった。それによると来年はよい年であると説明してくれた。その後新婚の姉さんの家を訪問した。（同じ敷地内で彼女の家近

くにスィートホームを構えていた。）ご主人は兵士でまさに仕事に向うところであった。部屋は１ＤＫで５０㎡もあり、こざっぱりとした生活ぶりであった。結婚式の写真を見せてもらい３０分ぐらいおじゃました後、家に帰った。途中公園や軽食を出す店や、草花を育てている心やさしき兵士の家を見学した。ホームステイ最後の夜、日本から持って来た土産を出そうとすると、突然頭にクシを入れ、身仕度し写真を撮るように促した。将軍はセレモニーの仕方をさすがわきまえていらっしゃる。

１２月５日（月）、昨日私が希望したカレーを朝食べさせて頂き非常に感激しました。とにかく今まで食べたカレーの中で最高のものでした。

その後近くの子供の集会場へ行くと、子供達がロックのリズムに合わせて踊っていました。年長の女の子が教えており私達が近づくとますますのりに乗って踊って見せてくれました。日本人に興味があるらしく、矢継ぎ早に英語で尋ねられました。

昼近く、一家全員で写真を撮り、車で（母親以外）バンコックへ向い買い物・食事を済せた後YMCAに送って頂いた。

またホームステイの感想としては、父親の職業がタイでも特権階級である軍人であり、一家が公務員ということもあって（彼女は役所づとめ）、日本の中流公務員並びにサラリーマンの家庭と変わりがないように感じられた。そしてホームステイということで、ことさら執拗に世話を焼くことなく、さりげない親切、やさしさが私にはうれしかった。

ただ襲いかかる「蚊」とトイレの使用に不慣れな点が難儀した。

鳥取県　　吉　持　秀　紀

彼女の名はクハァンルアン、職業は農業、今年１０月アセアン青年招へい事業により来日ホームステイを体験している２０才のお嬢さんだ。しかし、英語は話せないそうだ。彼女の家はバンコックより北西へ７０㎞車で約２時間かかるそうだ。これが今回のホームステイでお世話になるお嬢さんについて事前に教えられた全てでした。ここで少し心配になった、というのは彼女は英語が話せない、僕はと言えばタイ語は愚か満足に英語さえ話せないのに、どうしてコミニュケーションを図ればいいのだろう？。正直なところ困ってしまったが、日系のデパートに日本語の本店があると聞きさっそく日タイ辞典を買いとりあえずは安心しました。１２月３日、ホストのクハァンルアンとお姉さんに会い簡単な挨拶を交わし、タクシーにて彼女の家へと向う。すれ違う車は大半が日本の車で、看板を見ても日本の会社が多かった。

１時間も走ったのだろうか、過ぎ去る景色は水田とバナナやヤシの林そしてまばらに見える家々、この辺りの水田にはもう稲はなく来年の準備をしている狭間に僕はタイの農家に来たのだと分かった。車の通り過ぎた後に赤い土煙が舞い上がるそんな道だった。

「どんな家なんだろう」と思いながらタクシーに揺られてしばらく行くと彼女の家に着いた。その家とはまさに途中何軒かあった高床式の家そのものだった。しかし、誤解してはいけない

が高床式の家はタイの農村でも比較的裕福な人でなければ建てられないようだ。着くと家族の歓迎を受け挨拶をしたが、「１２人とはえらく大所帯なんだな！」と思ったが実は４人家族だった。上にあがると１室を除いては壁の仕切りや戸が少ない。涼しくするための工夫なんだろう。また室内の内側には家族の写真や国王の写真が掛けてある。それだけ家族を思い国王を尊敬している証明なんだろう。もっと驚いたのは冷蔵庫にステレオ、テレビに自動炊飯器等の電気製品が揃いてあることだった。やはりタイの農家の中でも比較的裕福な家なんだと思った。やや遅い昼食をよばれた後、持ってきたお土産を差し上げたのだが、受けたのは祭りに着るハッピと日本酒と絵葉書だった。特にお父さんには日本酒が一番受けてたようで、１０分ほどでほとんど飲んでしまった。よっぽど強いのだろう、全く酔った表情など見えない。のんびりしているとクァンルアン嬢に「少し散歩でもしない？」と誘われ彼女と一緒にでかけた。部落内を歩いているとやたら各家々によるので聞いてみると自分の親戚なんだといっていた。つまり親戚が村を作っていると考えていい、またそれがタイの一般的な農村の成り立ちらしい。だから今でも農作業など親戚や近所の助け合いで行なわれているそうだ。今の日本に失われつつある血と血の絆の強い結び付きをこのタイで見つけ、ふと嬉しくなった。挨拶回りを２時間かけ家に帰ると彼女の兄であるスサミアンさんがバンコックから戻って来ていた。彼はバンコックでコンピューターのプログラマーをしている。彼はタイ人らしい明るく、素直で、勤勉な性格の青年で英語を話してくれるので僕は大変助かった。

夕食後「風呂に入って下さい」と彼女に言われ風呂に入ったが日本とは全然違う、タイの風呂は日本で言えば行水になるので１日何回でも入れるわけだが、お湯ではなく水だ。夜でも水は暖かいだろうと思ったのが大失敗、（乾季の夜と朝方は冷え込むのだと後でガイドブックを読んで分かったのだが）、水を手桶で汲みかけた途端、思わず声を上げそうになる程冷たかった。体を洗うとすぐに風呂を上がったのだが意外にもその後はポカポカと体が暖かくなってきた。夜はお兄さんと互いの仕事の話や趣味のこと、日本のこと等話し合った。

４日５時タイの朝は早い。バナナの木に吊されたスピーカーから音楽やらニュースが流れてくる。まだ薄暗いうちから女性は朝食の準備や掃除、洗濯と忙しい。

今日はアユタヤ観光に連れて行ってくれると聞いていたので楽しみにしていた。８時親戚や兄弟計１２人の大移動、１時間後アユタヤに着いた。まずプラ・モンコル・ボピットを見た。ここは仏像の大きさと美しさではアユタヤ随一と言われている程大きな寺院だ。また２人の占い師が客を相手に熱弁をふるっていたのが印象的だった。次にワット・プラ・スリ・サンペットへ行く。アユタヤ朝の王宮の中に置かれていた礼拝堂だが、３つの大きな灰白色のパゴタが印象的、急な石段を登るのに息が切れ、足が痛くなったという苦しい思い出がある。次いで近くにあるラマ公園入った。さすがは南の国タイ奇麗な花が咲き誇る公園で日曜日ということもあり家族づれでにぎわっていた。「もう帰るのかな？」と思っていたら「次はバンパイン宮殿へ行くんだ。」とお兄さんは言う。ここはラマ４・５世により再建され西洋と東洋の文化が交

わる宮殿だ。やたらと観光客が多かった思い出がある。最後に名前は忘れたが、野鳥園と市場、職業訓練校が集まったチャオプラヤ川に沿った公園に行った。特に印象に残ったのは職業訓練のため織物、革製品、美術工芸、ガラス細工、機械修理、民芸品等様々な分野に分かれ実習していた。そして日差しがやたらにきつく肌に痛いくらい暑かったのを覚えている。

その夜近所の彼女の友達が２人来た。１人は２３才の女性で米専業農家、ここから２㎞の道のりを自転車でやって来たと言っていた。もう１人は１９才の青年で２０haの米専業農家だそうだ。彼らはとても純情だった。もちろん初対面の日本人ということもあっただろうが、特に青年は若く、口下手ということも手伝ってか会話の中へ入れない様子。彼らにとっての夢を聞こうかと思ったが、僕の語学力では程遠いので諦めた。また日本の詰め将棋のようなタイの遊びを教えてもらった。アユタヤ観光以上に楽しい夜だった。

５日、今日でホームステイも終わり。"束の間"そんな言葉がぴったりはまるホームステイだった。近所の家に別れの挨拶をしに行くと、８０才くらいのおばあちゃんが「１年ほどここにいれば…」と勿論冗談で言ってくれたのだろうが嬉しい一言だった。このおばあちゃんの言葉に象徴されるように、出会った人々皆温かい人だった。特にクァンルアン嬢に関してはつい最近日本に来たということで食事を含め生活面でかなり気を使ってくれたように思う。よく彼女が口癖のように言っていたマイ・ペン・ライ（気にするな）という言葉が、タイの人に共通する優しさなのかもしれないと僕には思えた。

4. 訪問国における青少年団体の活動状況

ドゥアン・プラティープ財団

１２月１日午後から、プラティープ財団を訪問する機会に恵まれた。プラティープ財団の広報担当アルニィンさんより、スラムの問題、財団の設立・目的・活動内容等について以下の通り説明があった。

(1) スラムとは

① スラムの発生

タイのスラムは、国の近代化政策による不均等な開発の結果生まれ、1,０２０以上のスラムが形成された。

② スラムの問題

＜法的問題＞

一時的あるいは永住者として、スラムを形成するため、自分たちの家を法的に登録することが不可能であり、また子供の出生時や住所移転の際、住民登録がなされないため、スラムの住民の法的立場が不安定になる。

＜住宅と立ち退き問題＞

スラムは、沼泥地・川岸・線路沿いなどに形成されている。住民は家賃を土地所有者

に払うか、非合法な無断居住者として生活しているため、家の所有権または一定期間の居住保証しかないため常に立ち退きの恐怖にさらされている。

＜健康問題＞

スラムの劣悪な住環境、衛生思想の未発達や水の不足などで、スラムはけっして健康な生活を送っていないため、栄養失調にかかっている。

＜経済的問題＞

スラムの住民の多くは単純労働で臨時で雇われ、わずかな稼ぎしかなく、この金額では生活をしていくのが大変であり、若者の多くが無職の状態である。

＜社会的問題＞

麻薬中毒と犯罪が家庭を崩壊させている。

＜教育問題＞

スラムの多くの子供たちは義務教育を終了していなく、子供たちは家計を助けるため仕事をしている。

(2) 財団の設立

プラティーブ財団は、当初の目的として、①スラムの人たちにも住む権利がある。②スラムの子供たちを教育の場に連れてくる。

以上のことを目的として設立され、１８７９年アジアのノーベル賞と言われるマグサイサイ賞（社会福祉分野）を受賞したのを期にその賞金をもとに財団を設立した。財団としては１０年間、活動としては２０年間になる。

(3) 財団の目標

① スラムに住む子供たちと若者を教育する。将来彼らが、自分自身とその家族のために働ける能力と知識を持った良い市民になるよう、職業訓練・指導を行う。

② 子供たちと若者が健康で良好な生活を得るため、そして社会や国にとって有用な人材となるため援助する。

③ 貧困地区の問題に関する研究活動を支援する。

④ 若者の教育と訓練の理論と実践について、私たちが学んできたことを公開し、広報活動を行なう。スラムにおける開発、人的交流、そして環境に関する情報を出版する。

⑤ 公共福祉事業にたずさわる他の団体と共に活動していく。

(4) 財団の活動内容

① 教育里親プロジェクト

１９８５年１２月現在、７２４人の子供がこの制度の適用を受けている。国内、日本、オーストラリア、アメリカ、ヨーロッパ各国の里親の元に送られている。

援助額　（１９８４年度）　６０米ドル ― 幼稚園または小学校に通う子供１人の年間費用

９０米ドル ― 中学校生徒１人の年間費用

② 麻薬・エイズの撲滅

③ New life 活動

不良になった子供たちを、南タイに連れていって農業を通して更生させる。

④ 住人組織

スラムの大そうじ

⑤ ランチ・プロジェクト

１日１回おいしいものを食べさせる制度

⑥ 聴覚組織

難聴の子供たちを回復させる仕事

⑦ 他のスラムにおける教育活動

クロントロイ以外のスラムと協力し幼稚園を運営し、現在８つの幼稚園が設立されていて運営事業費及び教材設備の援助を行っている。

⑧ 青年への啓蒙活動

スラムの若者たちに音楽演奏やスポーツその他の催しなど多くのリクレーション活動をしている。また、若者が麻薬中毒や犯罪に身を落すことのないよう、それらに対する理解を助けるためのセミナーを開いている。

⑨ 生活指導

病気などの緊急時、新生児の届け出、職業紹介、薬の服用法などの指導・援助をする。

⑩ 移動学習センター

子供たちに移動図書室、人生劇・物語り、音楽や踊りを通して身近に学んでもらうことにより、子供たちの想像力・創造力を育てるだけでなく、母親など大人たちに学習の機会が得られリクレーションを兼ねた新しい教育活動を行っている。

(5) 総　　括

プラティーブ財団は、住むことの権利から始まり、今年度は設立１０周年を迎え１０年間の反省としては、国のために何をしたか、またスラムの人たちに何をしたかの反省の時期にきている。しかし１９８０年にクロントイ港当局が新しい拡張のために、立ち退きを要求してきたが、コンテナ倉庫用地に移動し、少なくとも２０年間は住むことの権利は得た。それにより居住権を得たのでスラムではなくなったということが成功の１つであった。

経済面では、新しい住宅に住むと借金が増えるので、借金を返すために働いているという現状である。また、

① 青年の指導者及び住人たちのリーダーたちが財団の理解を示したので非常に活動がしやすくなった。

② タイの経済状態が非常に早い速度で進んだが、経済の均等化にはならなく、貧富の差

が激しくなり、政府に対して、これ以上のスラムが増えないように要請しスラムの人たちの生活を少しでもレベルアップするように努力したい。

③ 中流以上の人たちは、スラムの人たちを見て、諸悪の根源だというが、それは結果でありもっと根源を見て問題を考えてほしい。

④ 青年の活動としては、家庭内にも問題があり、また貧しいのでボランティアをする余裕がなく、以前は青年の積極的な参加がなかったが、活動の理解を得る前に家族の理解と麻薬の撲滅が大事である。

以上のようなプラティープ財団の活動のもと、政府からは金銭面の援助はないが、病人が出たとき優遇してくれることや、麻薬常習者の保護に対して警察と協力し、保護者を国立病院及び寺院の2ケ所に収容するシステムになっているが、ここクロントロイのスラム街は港に隣接しているため麻薬の常習者が跡を絶たない状況であるようだ。

また、プラティープ財団の説明のあとスラム街を視察したが、スラム全体が汚く鼻を突く匂いが忘れられないし、しかもそこに住む人々の無気力感と同時に冷たく鋭い目には背筋が冷たくなるものを感じた。私たち一行は、豊かな日本経済に育てられたこともあり、スラムということに対して何らの事前知識もなく訪れたため、ここプラティープ財団でボランティア活動をしている日本女性と会った時には、ボランティア活動というものに対して考えさせられるものがあった。

5. 青年招へい事業に対する相手国側の評価（関係機関、帰国青年等）

(1) 総理府青少年局

総理府青少年局ハックティ次長（外国担当）より、青年招へい事業に対しては、非常に感謝し、今後とも継続してほしい旨要望があった。しかし内容的なものの要望としては、

① 内容的にもっと深く、専門的な日程を期待したい。

② 科学博覧会等各種イベントに視察に行った時にも、各パビリオンについても説明をお願いしたい。

③ 農村青年については、日本の農家生活を出来るだけ体験させてほしい。

④ 京都・広島の見学旅行は、文化的なものの見学にとどまるだけでなく、学術的な深いものにしてほしい。

⑤ 現地プログラムと共通プログラムの内容が重複しているので改善の余地があるのではないか。

⑥ 通訳は専門的な分野において欠点がある。

⑦ 日本語のハンドブックをもっと実用的でわかりやすいものにしてほしい。

(2) 同 窓 会

同窓会との懇談に出席した6名全員が非常に日本の印象に対して好感をもっていてくれ

同窓会の広報紙を通しての活動も、全員が高い関心をもっているとのことである。しかし同窓会の役員に対しての再来日の希望があったことを付け加える。

(3) 農業改良普及所

当普及所管内での、海外で受けるプロジェクトとしては、専門研修としてのカウンターパート及び青年招へい事業があり、過去に数名が参加している。

また、当普及所はいい人材を育てることを目的として設立されているが、青年招へい事業を含めた海外プロジェクトで受けた、日本の教育が帰国してから参考になっているので今後とも継続してほしいとの要請が普及所長よりあった。

(4) ワラノップ果樹園

青年招へい事業において、日本の農業を勉強したことが、現在の果樹園経営において参考になり現在においては、地域の農村青年のリーダー及び青年団体の教育の構成メンバーとして指導を行い、地元の目標になるばかりでなく、海外からも果樹園を視察に来るなど立派な経営をしている。

以上の通り、タイ国における表敬及び訪問先において、青年招へい事業の標価は一様に高く今後とも継続してほしい旨の評価があった。

6. 調査チーム参加者の感想

茨城県　藤田忠雄

青年招へい事業アフターケアは、日本招へいから出発した本事業を双方向の交流に発展させ、専門分野別に帰国青年の日本理解及び研修成果を更に深め、永続的に友情関係を樹立するために今年度から実施された。本事業に全国農村青少年教育振興会で、実務担当者として、青年招へい事業に携ってきたが、実際にタイ国という国を肌で接する機会に恵まれ非常な経験として残った。

現在、振興会は農村青年グループ及び学生（農学系）を含めて約１００名実施協力団体として業務を実施したが、タイ人の印象としては、非常にまじめで純真であるということである。とくに農村青年グループはほぼ全員が純粋な農民ということで、英語は話せないが各視察先においてもメモを取るなど非常に好感がもて、ホームステイを引き受けてくださった家族の方々からも、日本人の失ってしまったものに出会えたという声をもらうほどであった。

現在タイ国は乾季で、一年で最も涼しく過しやすい時期であり、事前にタイ国の生活習慣等コーディーネータを通してある程度の情報は得ていたので不安はなかったが、実際タイ国際空港に降りたちホテルYMCA に向う途中、日本車の多いことやビルの建築ラッシュなど東京と変わらない光景に驚かされた。とくに、バンコックの車事情は東京と大差なく、排ガス規制がないことや、タイ人の足となっている三輪車（サムロー）が多数あるので、二酸化炭素で目が痛い程であった。

アフターケア実施にあたっては、国際協力事業団タイ事務所・総理府青少年局の方々には大変お世話になり、とくに総理府青少年局からは、１０日間（ホームステイ期間中は除く）職員が１名各視察先へ同行してくれタイ国における日程が円滑に行なわれた。

今年度から実施された本事業ということもあり、振興会をはじめとしてタイ国における各関係者とも対応に苦慮したようだ。とくに日程の決定が遅れ、国際協力事業団タイ事務所で最終日程をもらうなど日程上不安であり、行ってみて視察先の状況がわかるなど、事前準備がなく質問事項をその場対応で考えるなど問題があったと思う。

しかし我々調査チームの対応をしてくれたのが、昭和６３年度来日の農業青年グループ団長のノッパワンさんを始めとした青年たちであり、私も彼らと一緒にプログラム・コーディネーターとして約３週間帯同したので、再交流という意味では非常に役立つことができた。ノッパワンさん及びチャレムさんにはホームステイの２泊３日カンチャナブリまで一緒に行くなど経費の面でも大変負担になったのではないかと思う。

また、セミナーにおいては当初バンコック周辺から参加してもらうということで、農村青年は数少いということであったが、ノッパワンさんの協力によるところが大きかったと思うが、農業青年グループの１７名がタイ全土から参加してもらえ、しかも日本語のガイドブックを持参しフリートーキングをし、タイでの再会を非常に感激してくれ楽しいひとときであった。

タイは、治安も安定し気候も温暖で過ごしやすいという印象であった。今回は観光が目的でなかったので、タイの経済の反映と同時に抱えるスラムの問題など両局面を見ることが出来たと共に、タイの農業経営なども見学でき参考になる面が多数あった。とくに私個人にとっては、青年招へい事業で知り合えた多数の人たちと会える機会に恵まれた喜びと同時に、帰国する際に「ぜひタイに帰ってください。私たちが日本で受けたと同様に歓迎します。」と言ってくれたそのままに大歓迎してくれ、タイ国の人々の誠実さにふれることができ、忘れられない国の１つになった。

神奈川県　　崎　山　成　人

タイという国に関しあまり知識がなく、農村及び田園都市のみを想像していたが、実際行ってみて、バンコック市などは近年日本企業の進出が盛んで、いたる所に日本企業の看板が目についた。また日本の自動車・家庭電化製品が多いのにも驚かされた。またバンコックの町中で見かける人々の顔や工場などで働いている人々の表情などは非常にゆったりと明るく、東京で慌ただしくせかせかと働いている私にとっても羨ましくも思えた。

農業普及所やセミナーでの説明でも出たがタイも土地問題が深刻でいろいろと苦労しているようだが、農地に関しては、日本は減反政策を取っているが、タイでは農地拡大に努力をしているのが大きな違いのように思えた。また青少年特に農業の青年に関しては、県もしくは国が積極的に技術指導をしたり、自発的に改善努力がなされるよう環境づくりを行なっていたのが

印象に残った。

タイの人々には、親切にしてもらったが、もっと時間をかければ本音の部分を垣間見ることが出来たのではないかと少し残念な気がする。とにかく私にとってタイはもとより海外は初めての経験であり、いろいろと望んでもなかなか体験出来ないことを、実際目にふれ体に感じ非常に有意義な訪問であった。

鳥取県　吉持秀紀

昨年タイの大学生のホームステイを引き受けました。同じホームステイなら思い出に残るよう、また彼らにとってよい勉強材料となるよう「我が家の農業なり、農家の生活など見せてあげたい」、という気持でホームステイを引き受けました。このホームステイを彼らがどのように考えたかは分かりません。しかし、彼らは彼らなりの物差しで、我が家の農業や農家の生活を見、感じてくれたと思います。しかしホームステイを受け入れた側の僕はと言えば、タイをあまり知ろうとは思わなかったし、またその努力もしていませんでした。今でもなお彼らと文通を通してわずか２泊３日のつながりを大切にしています。「互いが互いの国について知り合うことから長い付き合いが出来るのではないだろうか？、そしてそれが広い意味での国際交流ではないか？」と考えました。

今回の事業に期待していたことは、タイという国を知り、築いた友情を育て、また新たな友情を築くということでした。

実際この事業に参加してタイをあらゆる角度から垣間見ることができました。あいにく目的の１つであった大学生にはスケジュール等の都合で会えずじまいで大変残念でしたが、それでも他の目的は達成できたので僕にとって実りあるものだったと思っています。

このプログラムの中で特に心に残ったのは、スラムの中にあるプラティップ財団の訪問とマノ青年の果樹園の視察、ホームステイでした。プラティプ財団の視察について、おそらく人間なら誰もが目をそむけて通りたくなるスラムにあって、青少年の教育を主たる目的に、各事業に取り組むボランティアの姿は天使にも見えるでしょう。しかし僕にはスラムに住む人々の目の鋭かったことの方が強烈な印象として忘れられません。タイの綺麗な場所ばかりでなく、普通決して見られない場所を見られたことは大変貴重でした。

マノ青年の果樹園の視察について、タイにあって新しい農業の方向を模索し、計画に沿って実践し、完成度の高い果樹園を作った。先進的農家の視察先としてもっとも最適な場所だったように思いました。

ホームステイについて。今回の事業でもっともタイをよく知ることのできたプログラムの１つだったように思います。そして観光で来ていれば決して見られないタイの農村の生活と心の触れ合いを短時間でしたが感じることができ、素晴らしい体験をしました。

先に書いたように観光では見られない所が見られ、ガイドブックにのっていない生のタイを

感じられたことはとてもよかったと思う。

栃木県　中荒井　正

私は、今回の調査チームに参加し、実際に自分の目で、タイの国を見る事が出来、大変嬉しく思っています。

私は、主にバンコック市内を、見たわけですが、高層ビルが多いのには、びっくりしました。道路も広く、車も多かったですが、貧富の差があるらしく、高級車も多いが、古い車もあり、中には、ボンネットがない車が走っているのには、驚きました。

スラムに行った時は、麻薬を吸っている青年や、一日中学校にも行かずに遊んでいる子供達、湿地に建てられたバラックなどを見て、町が近代化して行く反面、こう言う人達は、取り残されてしまったのだなと思う。もっと政府が、援助して、スラムの人達をなくさなければいけないと思いました。

アントン県に帰国生の農場を見学に行った時に、道路の両わきには、水稲が、作付けされていましたが、雨が多かったらしく、水が地面から３０㎝くらいまでありました。

これでは、とても機械化するのは無理だと思いました。最近では、水稲に変わり、果樹や野菜が増えているらしく、段々に、その土地に合った、農業をして行く方向に変わって行くと思いました。また、帰国生と会って話を聞きましたが、彼は、水稲から、果樹に変えるのに、父親を果樹園に連れていったりして説得し、果樹を始めたらしく、現在では大変立派な経営をしているのを見て、感動しました。自分も農業青年の一人として勉強になりました。

私は、１０日間の中で多くの人と知り会いましたが、全員とても私に親切にしてくれました。本来ならば、タイ国に行ったならばタイ語を話すべきでしょうが、私は全く話せず英語ばかり使っていました。それでも彼らは私に合わせてくれ、英語で話をしてくれました。

特にホームステイでは、通訳の方がいないので、心配していましたが、何とかお互いに話す事が出来て、タイの家庭については、日本の家庭に似ていまして、子供達は両親によく従いました、私のようなお客さんを大切にしてくれ、食事の時など、料理を私達に先にすすめてくれたり、いろいろな物をテーブルに出してもらいました。そして、円満で一日中楽しい会話がたえませんでした。

最後に、私はタイに行く前に想像していたタイについての考えと、行った後とでは大部違いを感じました。それは、想像していたよりももっと身近かな国だと思いました。国勢や、国民性が似ていると思います。また天皇と国王の違いはありますが、尊敬する気持は同じに感じました。

やはり、先進技術などは日本と比較になりませんが、これからは西側諸国との付き合いも大切ですが、アジアにもっと目を向けなければならないと思いました。

7. 提　　言

今年度より実施されたアフターケア調査チーム派遣事業は、初年度ということで、事業の実施方法等で、実施団体である全国農村青少年教育振興会を始めとして、国際協力事業団タイ事務所及び受入れ国であるタイ国総理府青少年局においてもとまどいがあり、アフターケア派遣事業の目的が相手国に充分伝わっていない感があったので、相手国の各関係機関に対しても主旨の徹底をお願いしたい。

また日程については、最終決定が、タイ国に訪問してから知らされたこともあり、訪問先における知識がなくその場において対応する結果になったので、事前に決定してほしいと参加者一同の感想であった。また訪問先決定においても単なる会社訪問でなく、オリエンテーションにおいて訪問する目的の説明があるとより充実した訪問になると思う。

次にホームステイにおいては、可能なかぎり１人１家族にしてもらうことを訪問国においてお願いしたい。また日本においてもありがちだが、ホームステイが観光中心になってしまう傾向にあり、タイ国にても例外でなく、金銭面において負担をかける結果となったので、家族との触れ合いの中から訪問国に対しての理解と交流が広がるように、一般の家庭生活を体験できるように今後要望を出したいと思う。しかし我々参加者一同タイ国の人々の誠実さに接することができたことによって、タイ国がより一層印象深くなり、再度機会があったら訪問したい希望が参加者全員からあった。

我々アフターケア調査チームは、農村グループであり、セミナーに関してはバンコック市内中心において参集する意向を総理府青少年局から連絡を受けていたが、タイ国全土から昭和63年度農村青年グループの青年たちが集まってくれた。しかしセミナーのもち方として、タイ農業の概要説明に時間の大半を費やしてしまう結果になったが、我々日本参加チームとしては、タイ国農業に関して認識がなかったこともあり非常に興味深く参考になったが、タイ国全土から集まってくれた青年たちとの交流を中心に持っていくべきだったという反省材料があった。また事前に参集範囲がわかればセミナーにおけるテーマの設定が容易になり、より成果のあるセミナーになると思う。

タイ国における訪問に関して、訪問日数の１０日間は適当であった。しかし農業青年の訪問という面から考えると、移動に時間がかかること、バンコック郊外にしか訪問出来ないという欠点もあるが全体的には妥当である。また時期に関してもタイ国においては、乾季であり非常に過しやすく１２月上旬は最適であった。

しかし総理府青少年局として、事前に日本側参加者のアプリケーション・ホームをほしい旨要望があり、アプリケーション・ホームを参考にして、ホームステイ家族・セミナー参加者の決定をすることにより、日本側参加者の希望に沿った日程にしたいということであるので検討を国際協力事業団にお願いしたい。

最後にアフターケア調査チーム参加者一同貴重な経験になった、当事業の協力をいただいた

国際協力事業団タイ事務所・タイ国総理府青少年局他各関係者に対してお礼を申しあげます。